

袖ヶ浦市山野貝塚発掘調査報告書

平成4年度

財団法人 千葉県文化財センター

さん や
袖ヶ浦市山野貝塚発掘調査報告書

平成 4 年度



財団法人 千葉県文化財センター

序

千葉県内には、2万5千か所にのぼる多数の遺跡が所在しますが、その中で縄文時代の貝塚は647か所確認されています。これらの貝塚の個々の外見、規模などは周知のところですが、一部の著名な貝塚を除いてはその実態があきらかにされた例が数少ないのが実情です。

また、首都圏に位置する本県では、近年のめざましい開発に伴い、地理的景観や歴史的風土に急激な変貌が見られ、城館跡、貝塚、古墳などの埋蔵文化財にも大きな影響を及ぼしています。

このため、千葉県教育委員会では、昭和63年度から国庫補助を得て、重要遺跡確認調査の一環として県内に所在する貝塚のうち、歴史的に貴重なもので、開発等により破壊されるおそれのあるものについて、今後の保護、活用のための基礎資料を得ることを目的に、測量及び確認調査を実施し、実態を明らかにしてきました。

今年度は、現存する大規模貝塚では本県の最南端に位置する袖ヶ浦市山野貝塚の調査を財団法人千葉県文化財センターへ委託し実施しました。その結果、貝塚は大規模な馬蹄形を呈し、その外側には居住域、内側には広場的な空間があり、縄文時代後期の大規模な集落の一般的な様相を呈していたことが判明しました。

このように今回の調査では、小規模な調査であったにもかかわらず、これまで不確定であった貝層の分布範囲と居住域が確認でき、貝塚の全体像の把握に予想以上の大きな成果を得ることができました。

このたび、この調査成果を報告書として刊行する運びとなりましたが、本書が学術資料としてはもとより、文化財保護、活用の一助として、広く一般県民の方々にも活用されることを願つてやみません。

終りに、文化庁をはじめ、地元袖ヶ浦市教育委員会、財団法人千葉県文化財センター、土地所有者の皆様に心から御礼申し上げます。

平成5年3月

千葉県教育庁生涯学習部

文化課長 白石竹雄

凡　例

1. 本書は、千葉県袖ヶ浦市飯富3545-5他に所在する山野貝塚（遺跡コード481-013）の発掘調査報告書である。
2. 本事業は、千葉県教育委員会が国庫補助を受けて行っている県内主要貝塚確認調査の第5年次にあたるもので、調査は財団法人千葉県文化財センターに委託して実施した。
3. 発掘調査は、平成4年10月1日から同年10月30日まで実施した。
4. 整理および報告書作成は、平成4年11月1日から同年12月28日まで実施した。
5. 調査および整理・報告書作成は、研究部長 天野 努、部長補佐 渡辺智信の指導のもとに、主任技師 上守秀明が担当した。
6. 本書に使用した地形図および空中写真は、以下の通りである。

第1図 国土地理院発行の1:50,000地形図 姉崎(NI-54-19-16)と木更津(NI-54-25-4)を合成して使用。

第48図 袖ヶ浦市発行の1:2,500地形図 袖ヶ浦市地形図 NO.18 (IX-ME 13-2)を1:5,000に縮尺して使用。

図版1 京葉測量株式会社による昭和47年撮影の空中写真を使用。

7. 本書に使用した方位は、座標北を示すものである。
8. 調査の実施にあたっては、袖ヶ浦市教育委員会、飯富区長 伊藤昭二氏、所有地を快く貸してくださいました西沢直文、鈴木克士、都築敬二、在原清一、宮崎正雄、上田幸一、高橋房男の各氏、深井邦康、深井保司、小泉正雄の各氏をはじめとする地元の皆様から多大なる御協力を賜った。記して深謝の意を表する次第です。
9. 現地調査から報告書執筆にいたるまで、下記の諸機関、諸氏から多くの御協力または御指導をいただいた。特に脊椎動物の同定については、千葉県立中央博物館 小宮 孟氏、石材の鑑定については、千葉県立姉崎高等学校教諭 沢野 弘氏の協力を得た。各々記して深謝の意を表する次第です（敬称略、順不同）。

袖ヶ浦市角山配水場、袖ヶ浦市郷土博物館、財団法人 君津都市文化財センター

井口 崇、大谷克己、小宮 孟、沢野 弘、田井知二、菅谷通保、能城秀喜、

高橋龍三郎、小笠原永隆、鈴木佐智子、安藤七重

目 次

序 文

凡 例

I	はじめに	1
1.	遺跡の位置と環境	1
2.	周辺の遺跡	1
II	調査の概要	2
1.	調査研究歴史	2
2.	調査経過	3
3.	調査方法	3
III	各トレンチの状況と出土遺物	4
1.	トレンチの状況	4
2.	出土遺物の概要	8
3.	土 器	8
4.	土製品	19
5.	石 器	21
6.	骨角牙製品	26
7.	動物遺体	27
8.	貝サンプル	28
IV	検出遺構と出土遺物	32
1.	住居跡	32
2.	土 坑	39
V	ま と め	40
1.	貝層の分布	40
2.	遺構分布と集落の範囲	41
3.	出土土器にみられる集落の形成時期	42
4.	生産活動	42
5.	柄鏡形住居跡	43
6.	おわりに	45

挿図目次

第1図 山野貝塚の位置と周辺遺跡 … 図版目次裏	第26図 10T 出土土器 (2) 17
第2図 1973年の調査 2	第27図 11T 出土土器 (1) 17
第3図 1T・3T および検出遺構 4	第28図 11T 出土土器 (2) 18
第4図 2T 5	第29図 12T 出土土器 18
第5図 4T 5	第30図 各グリッド出土土器 18
第6図 5T 5	第31図 土製品 19
第7図 7T 6	第32図 土製円盤 20
第8図 8T 6	第33図 土器片錐 21
第9図 9T 6	第34図 石器 (1) 22
第10図 10T・11T 7	第35図 石器 (2) 23
第11図 12T・13T 7	第36図 骨角牙製品 26
第12図 1T 出土土器 9	第37図 SI-2 (1) 33
第13図 3T 出土土器 9	第38図 SI-2 (2) 34
第14図 1T・3T 拡張区出土土器 10	第39図 SI-2 (3) 35
第15図 SI-1 出土土器 10	第40図 SI-6 (1) 36
第16図 SI-3 出土土器 10	第41図 SI-6 (2) 37
第17図 SK 3・4・5 出土土器 11	第42図 SI-6 (3) 38
第18図 2T 出土土器 (1) 11	第43図 SI-6 (4) 39
第19図 2T 出土土器 (2) 12	第44図 SK-1 39
第20図 4T・SI-8 出土土器 13	第45図 貝層調査範囲 40
第21図 5T 出土土器 14	第46図 遺構分布概念 41
第22図 7T 出土土器 15	第47図 SI-2 立替の想定 44
第23図 8T 出土土器 16	第48図 山野貝塚周辺の地形 図版扉裏
第24図 9T 出土土器 16	折込付図 山野貝塚地形測量図 卷末
第25図 10T 出土土器 (1) 16	

表 目 次

表1. 基準点の座標値 3	表7. 動物遺存体種名一覧 27
表2. トレンチ杭の座標値 3	表8. 貝サンプル一覧 29
表3. 土製品属性 21	表9. 貝類の組成比率 (1) 30
表4. 石器組成 25	表10. 貝類の組成比率 (2) 31
表5. 石器属性 25	表11. 貝類計測値分布 31
表6. 骨角牙製品属性 26	

図版目次

図版1. 山野貝塚周辺地形の航空写真—昭和47年撮影—（約1:5,000）

図版2. 1. 遺跡遠景（西から）

2. 遺跡近景（東から）

3. 遺跡近景（東南の谷から）

図版3. 各トレンチの状況（1）

図版4. 各トレンチの状況（2）

図版5. 各トレンチの状況（3）SI-1・SI-2（1）

図版6. SI-2（2）・SI-6・SK-1

図版7. 土器（1T・2T・3T・SI-1・SI-3・SK-3・SK-4）

図版8. 土器（4T・5T）

図版9. 土器（7T・8T・10T・11T）

図版10. 土器（SI-2・SI-6）

図版11. 土器（4T・7T・11T・SI-2）

図版12. 土器（SI-6・SK-1）

図版13. 土製品・土製円板・土器片鍤・骨角牙製品

図版14. 石器（1）尖頭器・石鎌・石錐・楔形石器・UR-11・削器・石核

石器（2）打製石斧・磨製石斧・蝶斧・磨石類

貝層

・基準杭

範囲・境界

焼土

・補助杭

推定

灰

・土器

黒色土範囲

テフラ

・石器

床硬化

・土製品

用例

貝層サンプル

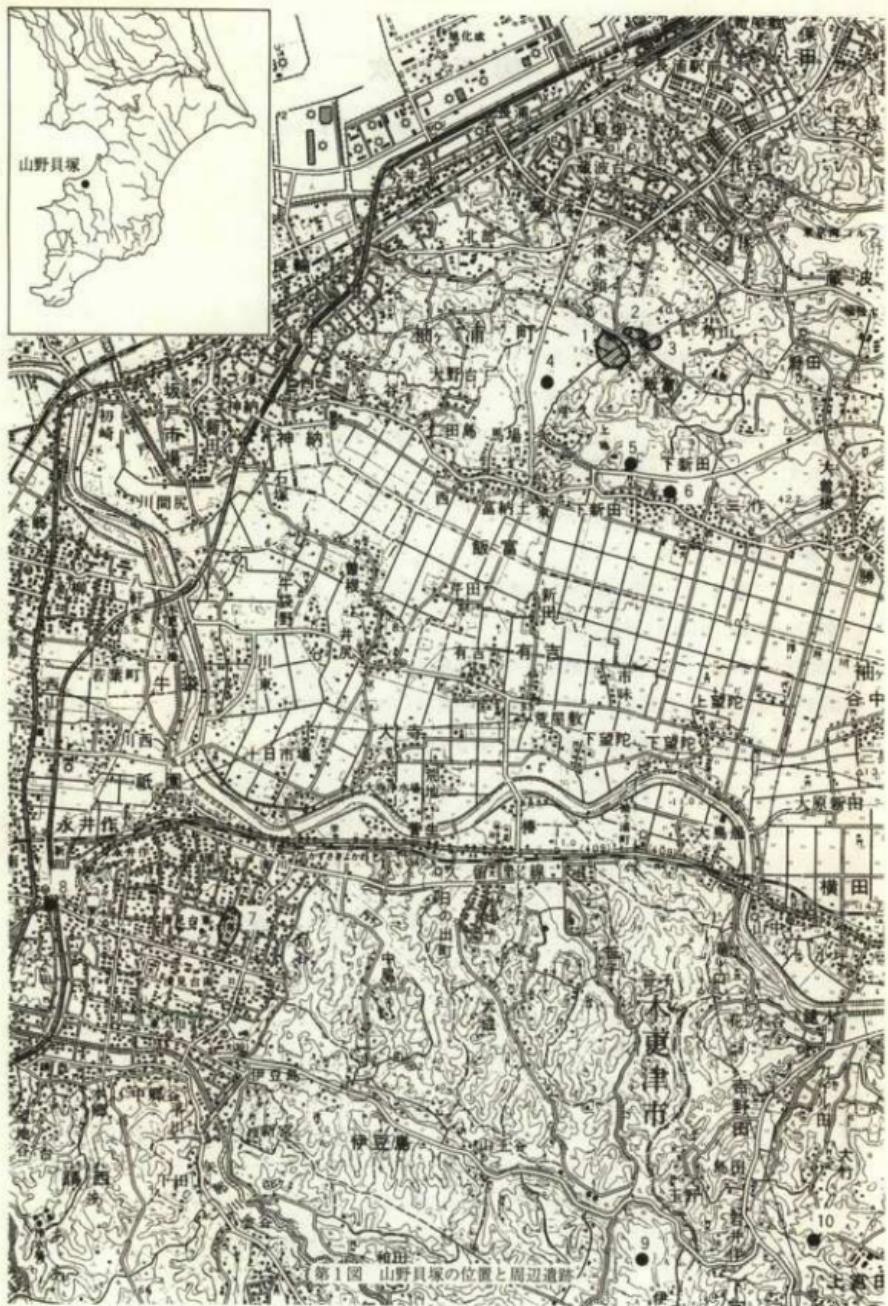
平面

水糸レベル

サンプル最上面

サンプル最下面

断面



第1図 山野貝塚の位置と周辺遺跡

I はじめに

1. 位置と周辺の環境（第1図、図版1・2）

山野貝塚は、袖ヶ浦市飯富3545-5他に所在する。遺跡はJR線長浦駅の南方へ約2.4kmの標高約35～36mの台地上に立地するが、ここは下総台地最南端の縁辺部にあたる。つまり清澄山系の元清澄に源を発し、袖ヶ浦市と木更津市との間で東京湾に注ぐ、全長約88kmの小櫃川下流域の右岸台地上に位置するわけである。遺跡の南には小櫃川の氾濫原から湾入した谷よりさらに枝分かれしたやや急な支谷があり、北東は境川から細かく枝分かれした小支谷に向かってなだらかに続く。このため小櫃川水系の小支谷に面した貝塚とはいえ、実際は分水界になる平坦面上に立地しているので、当時の生産活動は両水系に依拠していたのかもしれない。

氾濫原から湾入する谷口には、上池・下池と呼称される溜池が所在するが、この水源は主に雨水と思われる。周辺台地で保水された雨水は、谷に向かう斜面から「しほり水」となって流出し溜め水となったと考えられ、現在でも谷津田で利用されている。遺跡の現況は、一部の山林・宅地を除き、畑地である。一部には深耕がおよんでいる部分があるが、概して貝層の遺存状況は良好である。山林は南側の谷に面した台地縁辺に所在するが、これは春から夏にかけて、谷から吹き上げる強風に対する防風林の役目を幾分か果たしていると思われる。しかしながら、遺跡北側から東側にかけての緩斜面は、土層の厚い状況が看取されており、これは次第に風によって表土が移動した結果とも考えられる。1973年調査の東側貝層の外縁はこの位置にあたり堆積土は厚かったが、遺物包含層の形成と土の運搬作用が相まった結果かも知れない。

2. 周辺の遺跡（第1図）

調査などで明らかになったものを中心に、貝塚と縄文時代後・晩期の遺跡について第1図に示してみた。右岸地域では、まず山野貝塚の北東部に位置する伊丹山遺跡（2）が挙げられる。称名寺式～堀之内式期にかけて形成され、該期の柄鏡形住居跡2軒が検出されている。該期の遺物を出土する谷頭に面した角山遺跡（3）とともに、本来は山野貝塚の範囲を含んだ同一遺跡群の可能性が指摘される。また、山野貝塚と向山遺跡（4）との限界は、今回の調査結果から改めて検討される必要があろう。次いで上池を挟んだ谷口に面した宮ノ越貝塚（6）が挙げられる。中期前半～後期後半に貝塚は形成されるようだが、境No.2遺跡や西ノ窪遺跡を含んで堀之内式期を中心に遺跡群を形成している。他に貝塚では早期後半の大宮台貝塚（6）を示すが、三ツ作貝塚、飯富貝塚、下野田貝塚などは現在、所在不明のため図示しなかった。

小櫃川左岸地域では、充分な成果が報告されずに既に消滅した祇園貝塚（7）をはじめ、永井作貝塚（8）、伊豆島貝塚（9）などの著名な中期～晩期の貝塚が挙げられる。この他に堀之内式期の柄鏡形住居跡1軒が検出された嘉登遺跡（10）が所在する。

II 調査の概要

1. 調査研究略史

本貝塚の存在は、大正時代末期の開墾以降、地元では少なからず認識され、詳細は不明であるが私的小發掘が試みられたようである。その後、遺跡地図には記載されるが¹⁾、本貝塚が周知されるにいたったのは、1973年の發掘調査の成果が公表されてからである。

發掘調査は、1973年5月～7月に東京電力電線塔建設に伴って、東貝層のはば中央にあたる約900m²が調査され（第2図）、以下の成果が挙げられた²⁾。

まず、畠地内の貝層のボーリング探査を行った結果、東西約120m×南北約70mの範囲に、北側が若干途切れ、南側が大きく開口する平面形が相弧状を呈す貝塚であることが判明した。しかし山林内は探査できなかったため、相弧状の貝層の南限は未確定であった。次いで貝塚集落の形成時期は、貝層や遺物包含層から出土した土器から、後期前半掘之内1式～晚期前半前浦式期であることがわかった。また、質量とも豊富な獸・鳥骨や魚骨の出土が報告された。遺構の検出は、貝層下の不整形土坑が1基だけで居住域は把握されなかったが、県南部においては現存する大規模な貝塚を伴った、該期の貴重な集落遺跡であることが認識された。

本貝塚に関する主な研究成果としては、関東地方出土の関西系有文土器を論じるなかで、發掘報告書掲載資料から当該資料を抽出され、これを層位的な検討から晚期前半安行3b式期に併行するものとし、該期の関東地方遺跡例の示標とした論考³⁾と、掲載資料に未掲載分を加え、合計13点の加曾利B式～晚期安行式の土偶を再報告され（報告掲載分の1点は土板に変更）、調査面積に比しての点数から、多量の土偶を包蔵する遺跡と考えられた論考⁴⁾が挙げられる。



第2図 1973年の調査

1. 文化財保護委員会刊『全国遺跡地図』1967年

千葉県教育委員会刊『千葉県記念物所在地図』1971年

2. 野村幸希・西山太郎・千葉健造・金子浩昌『袖ヶ浦町山野貝塚』1973年

3. 鈴木加津子『関東北の関西系晚期有文土器小考』『古代』第80号 1985年

4. 山本哲也『君津地方出土の土偶』『君津都市文化財センター 研究紀要Ⅲ』1989年

2. 調査経過

今回の確認調査は、千葉県教育委員会が実施している県内主要貝塚調査の第5年次にあたる。
(財)千葉県文化財センターが委託を受け、平成4年10月1日～31日まで調査を実施した。

発掘調査は、土地所有者より借地できた部分に限られたため、必ずしも当初意図した位置にトレンチを設定できたわけではない。また、作物の収穫前であった畠地は、地主の協力で調査できた部分もあったが、位置を変更せざるをえない場合もあった。なお、併行して行ったボーリング探査の結果によって、予定した位置を変更した場合もある。トレンチは、例えば第1トレンチであれば「1T」というように呼称して、最終的には1T～13T(6Tは欠番)の合計12本のトレンチを調査した(折込付図)。限られた時間のなかで、しかも悪天候が続いたため、たいへん厳しい調査であったが、次項以降に記述するように貝層や遺構の分布など集落の状態を考えうえでの貴重な成果を挙げ、完了することができた。

3. 調査方法

貝層のボーリング探査は、長さ1mのステッキを用い1mメッシュの間隔で実施し、分布範囲を確認した。「貝層あり」の基準は、貝殻の厚みを認識できるものとしたが、純度が低くかつ層も薄いため判断に迷う感触の場合、今回は範囲としなかった。この結果、從来から認識されている貝層については、南限の範囲を追加することができ、東西の相弧状と大きく捉えられていた形状は、是非はともかく、それぞれがさらに分断された貝層の集合として把握された。一方、この精度を保ったことで、從来把握されなかった遺構内堆積貝層と考えられる小範囲の貝層を、相弧状の貝層の周縁で20か所以上も確認することができた。

分布範囲の測量は、貝層表面散布範囲とともに基準点(表1)に光波測距機を設定して行い、業者委託による地形図に併せ、縮尺:1/1,000で掲載した(折込付図)。

トレンチの設定は任意に行い、地形測量に際して各々の2点の公共座標値(第IX座標系)を測定した(表2)。遺構名で種別のわかるものについては、全体で種別ごとに通し番号を付し、それ以外はトレンチごとに番号を付けた。

杭名	X 座標	Y 座標
No.1	-63620.000	14900.000
No.2	-63660.000	14860.000
No.3	-63660.000	14900.000
No.4	-63700.000	14980.000
No.5	-63735.000	14900.000

表1 基準点の座標値

杭名	X 座標	Y 座標	杭名	X 座標	Y 座標
1T-N	-63616.000	14893.000	1T-S	-63620.000	14893.000
2T-N	-63651.340	14890.000	2T-S	-63660.000	14895.000
3T-N	-63612.000	14902.000	3T-S	-63616.000	14902.000
4T-E	-63690.000	14878.000	4T-W	-63690.000	14870.000
5T-E	-63690.000	14903.500	5T-W	-63690.000	14895.500
7T-E	-63653.500	14990.000	7T-W	-63658.000	14983.386
8T-E	-63722.500	14882.599	8T-W	-63725.000	14875.000
9T-E	-63697.000	14920.000	9T-W	-63701.000	14913.072
10T-N	-63735.000	14891.000	10T-S	-63743.000	14891.000
11T-E	-63678.500	14983.858	11T-W	-63680.000	14976.000
12T-N	-63725.000	14925.000	12T-S	-63733.660	14930.000
13T-N	-63718.000	14845.000	13T-S	-63724.000	14845.000

表2 トレンチ杭の座標値

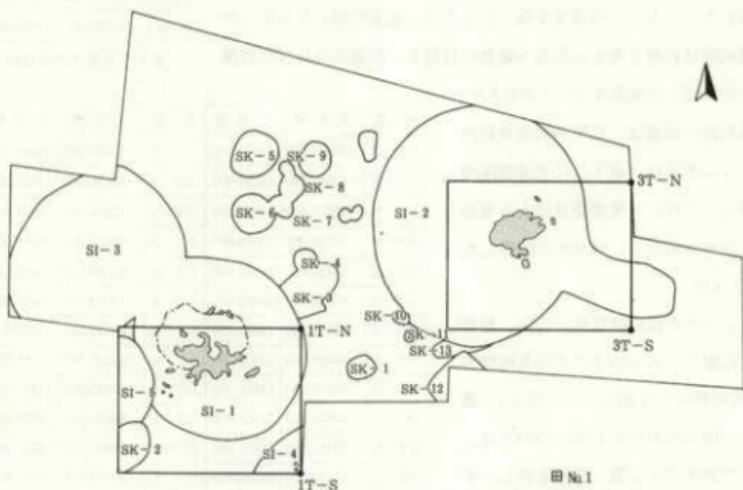
III 各トレーニングの状況と出土遺物

1. トレーニングの概要

トレーニングは、過去の調査成果（特に貝層の分布）や、今回のボーリング探査の内容を参考にして、貝層の堆積状況や遺構の分布する区域を把握することを目的として設定した（ただし、6Tは畠地の状況と日程の都合から調査を行わず、欠番とした）。その結果、限られた範囲のなかであったが、集落の広がり、貝層の内容を概括的に捉えることができた。また、トレーニングの設定ができず内容の把握が不充分なところについても、今後、確認調査を行う場合、必要となる区域を指摘しうる成果を得た。

1T・3T（第3図）

いずれもボーリング探査で範囲が確認された、小範囲の貝層の性格を知るために設定した。1Tでは住居跡の検出面に、3Tでは張り出し部をもつと思われる住居跡検出面に、それぞれ貝層の分布が認められ、いずれも遺構内堆積貝層であることがわかった。このためより詳しく内容を知るため、両トレーニング間を拡張し、遺構と貝層の範囲の把握に努めた。その結果、堀之内1式期以降の住居跡と考えられるSI-1～5、堀之内1式期の土坑であるSK-1、時期は未確定だが土坑と考えられるSK-2～13を確認し、遺構が密に分布する区域であることが把握された。耕作が表土下、約40cmの遺構確認面近くまでおよんでいるため、これらのうちSI-2とSK-1については継続して調査を行い、その内容は遺構の項で記述した。それ以外ではSI-1、SI-3、SK-3～5で遺物が出土しているが、検出面上に限られるため本節の土器の項に収載した。



第3図 1T・3Tおよび検出遺構 (1:160)

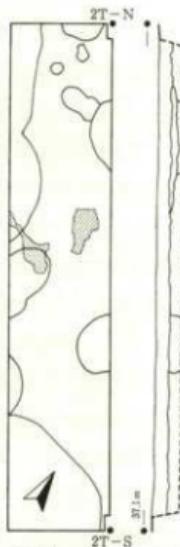
2 T (第4図、図版3)

トレチ設定位置は、大略的には馬蹄形を呈す貝層分布が途切れ、東西に弧状に分布する接点にある。貝層の表面散布も認められないため、探査限界深度以下の遺構内貝層の有無を確認することと、貝層分布が途切れる位置の遺構分布状況を把握するため設定した。その結果、二次堆積と考える小貝層ブロックと、詳細は不明であるが、多数の遺構の重複が確認された。また後期後半～晚期前半主体の遺物が包含されていた。

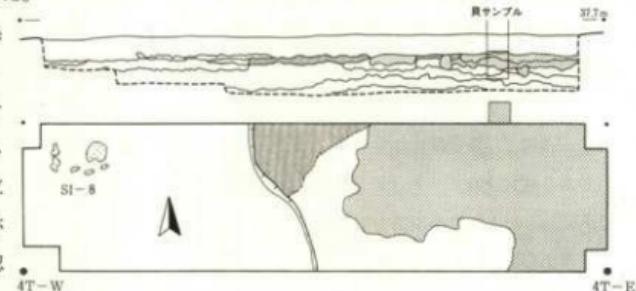
4 T (第5図、図版3)

トレチ設定位置は、遺跡最高地点にある西側の弧状貝層の外縁部にあたる。ボーリング探査で捉えられた貝層の状態と、貝層外縁部の遺構の有無を確認するため設定した。その結果、貝層は富士新期テフラを含むと思われる明褐色土層との層位関係で、堀之内1式の可能性が考えられた。これらの層の上面が耕作によって表土化しているため、全体的な層位関係が捉えられないが、かなり微妙な範囲ながらも明褐色土層の下面が貝層端部と、貝層に時期的に伴う黒色有機質土層上に堆積するためである。図示した位置で貝層のコラムサンプルを採取し、新期テフラも任意にサンプリングした。

また貝層外に遺物集中が認められたため、精査し掘り下げた。その結果、床面がローム層まで達していない位置につくられた住居跡を検出し、焼土を確認した軟質な面を床面と考えた。新期テフラ層



第4図 2T (1:120)

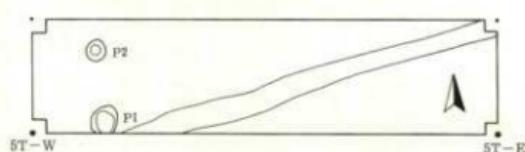


第5図 4T (1:80)

を切って構築されており、主体的な出土土器から加曾利B 2～3式期の所産と考えられる。

5 T (第6図、図版3)

中央部のくぼ地に向かう、西側の弧状貝層内側の緩傾斜面に設定した。弧状貝層内側の遺構分布の有無を確認するためである。その



第6図 5T (1:100)

結果、細別時期不明ながら縄文期の遺構は、柱穴状のビット2基が検出されただけにとどまり、

遺構分布は薄かった。ローム層上面までの層厚は平均して約70cmであるが、このうち耕作土以下の約40cmの黒褐色土中に後期後半～晩期前半主体の土器が比較的多く包含されていた。他遺跡の例と同様に、中央部のくぼ地がこの時期の遺物包含層となる可能性が考えられる。

7T (第7図、図版3)

当初は東側弧状貝層外縁部の遺構の有無を把握するために設定したが、ボーリング探査によつてこの位置の貝層が相弧状外の小貝層であることが判明したため、その性格の把握を目的とした設定になった。その結果、住居跡内に堆積すると考えられるイボキサゴ主体の貝層であることがわかった。検出面上で、土器などが数多く出土している。本住居跡はSI-6とし

TT-W

TT-E

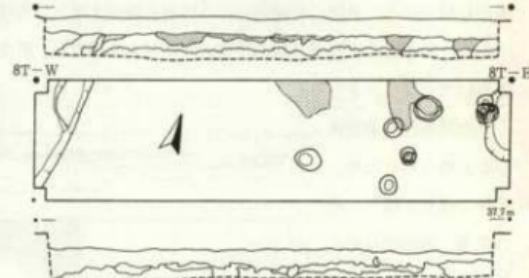


第7図 7T (1:120)

たが、詳細は遺構の項で説明する。

8T (第8図、図版4)

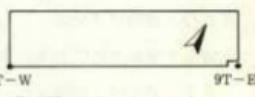
従来提えられていた塙地内の西側弧状貝層の末端の堆積状況と、この位置の遺構の有無を確認するため設定した。ボーリング探査では把握できなかった薄い堆積の混貝土層末端がトレンチの北壁際に検出されたが、南壁では表土化した貝片しか観察されなかった。この結果、従来より把握されていた道際まで伸びた貝層は既に表土化しており、遺構としてはかなり薄い層と考えられる。遺構では住居跡に伴う可能性がある柱穴状のピット6基（塙之内式？）と、性格不明土坑2基を検出した。



第8図 8T (1:100)

9T (第9図、図版4)

相弧状に分布する貝層の内側のくぼ地に、遺構が所在するのか確認のため設定した。結果的には耕作の進行が著しく、遺存条件が悪いためか検出されなかった。しかし少量出土した土器は晩期前半なので、5Tの所見同様に、詳細不明ながら中央くぼ地は居住域として利用されなかった可能性も考えられる。



第9図 9T (1:200)

10T (第10図、図版4)

前回の調査では山林であったため、ボーリング探査がおこなわれなかった区域である。草刈後、地膨れ状に盛り上がった部分に貝の散布が認められ、獸骨の破片も目についた。8Tと道路を挟

んだ位置にあたるため、西側の弧状貝層との関係、貝層の状態、遺構の有無の把握のため設定した。

その結果、地彌れは道路付設時の盛土と考えられ、以下に検出された貝層はほぼ水平に堆積していた。また8T側の貝層とのつながりは不明ながら、西側弧状貝層の南限が捉えられた。

貝層南限に接して、床面硬化部や貝層を伴う柱穴、土器片を埋設した炉を確認したので、詳細不明ながら住居跡と考えた。

貝層からの獸・魚骨の出土量は肉眼的にも多量である。

11T（第10図、図版4）

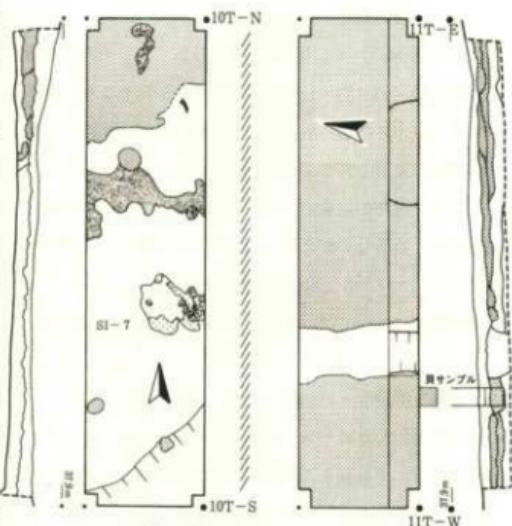
前回の調査で存在は確認されていたが、やはり山林内にあったため正確な範囲が把握されなかった東側の弧状貝層の末端の状態を調べ、遺構の有無を確認するため設定した。その結果、一部に新しい時期の溝がはしり破壊を受けているが、層厚約10~20cmの混土貝層、混貝土層を発掘区のはば全域に検出できた。ボーリング探査の成果と考え合わせると、貝層の末端はこのような状態で漸次薄くなるものと思われ、探査の限界を考えると正確な末端の状況は確定されなかった。また、貝層下に土坑と思われる落ち込みを検出し、図示した位置で貝層のコラムサンプルを採取した。

12T（第11図、図版4）

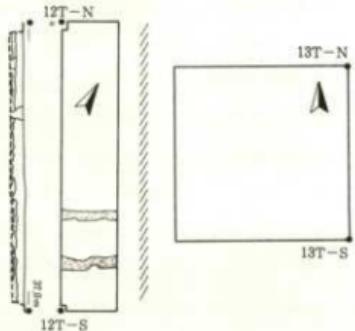
未探査区域は残るが、現状では貝層分布が遺跡南部には認められない。探査限界深度以下の遺構内貝層の有無を確認するため設定した。その結果、縄文期の遺構は検出されず、時期的には新しい軸状となつた道状遺構を検出したにとどまった。

13T（第11図、図版5）

ボーリング探査で捉えた小貝層の性格把握のため設定したが、農作業の障害になった貝層と多量の遺物の二次堆積ブロックであることが判明した。



第10図 10T・11T (1 : 100)



第11図 12T・13T (1 : 200)

2. 出土遺物の概要

今回の調査によって出土した遺物は、トレンチ内、遺構内、表面採集のものがある。その総数は整理箱（54×33×15cmの規格）で約60箱となり、調査面積の割には多量である。このうち貝層サンプルで15箱、獸・魚骨で3箱、石器で8箱、土製品や骨角器で約15箱を数えるが、全体の約1/2は土器である。これらは調査の性格上、大半がトレンチ調査によって得られた資料である。出土遺物の記載のうち大半を占める土器については、トレンチ出土のものに検出面で調査を終えた遺構分を加え、本節で各トレンチごとに特徴的なものを優先して説明し、精査した遺構のSI-2、SI-6、SK-1は次節で説明するが、ページ数の関係ですべての底部を削愛した。

他の遺物については、すべてを一括して本節で説明する。

3. 土器（第12図～第30図、図版7～9・11・12）

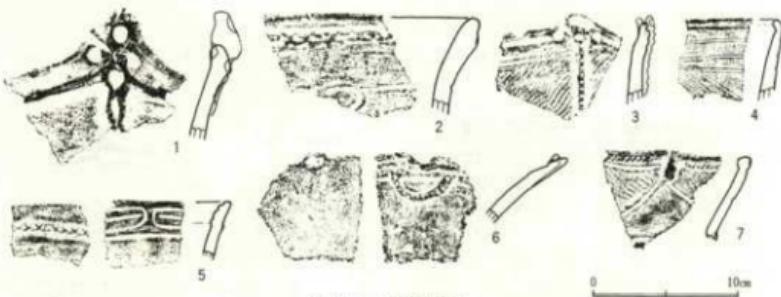
出土土器約30箱のうち、本項で取り扱う土器の絶量は、遺構出土分を除くと22箱を数える。本来ならば出土点数をカウントし、記述のための便宜的な分類にせよ類別毎の傾向を示すべきであるが、多量の点数を数的処理する時間的な余裕はなく、型式学的な認識不足もあって、なし得なかった。ここでは既存の型式名に即して、相対的な数量と出土傾向を概略的に記するにとどめた。なお、多量に出土したが二次堆積であった13T分は、除外している。

称名寺式	前回の調査では出土していないが、伊丹山遺跡でもみられるII式が数点出土している。とくに10Tでは貝層下の包含層から検出されている。
堀之内1式	前回の調査同様、最も多く出土しており、2T・4T・5T・9Tを除き、各トレンチや貝層出土土器の主体となる。遺構でも時期のわかるものはSI-8を除き、すべてとなる。1式でも中・新段階が主体となる。
堀之内2式	やはり前回同様に1式に次ぎ、各トレンチで出土した。なかでも10T・11Tで良好な資料が検出された。11Tでは貝層の一つに伴うであろう。
加曾利B式	前回よりも出土量は少ないが各トレンチで散見され、2T・4T・11T、SI-8では目立った。1式は僅少で、2式以降が主体となる。
曾谷式	認識不足のため、特徴的な部位以外、前後型式との識別はできなかったと思うが、前後型式がそれほど出土量でないため、少量であろう。
後期安行式	前回は貝層外縁の傾斜地に多く出土したが、ここに近い7Tがやや多い程度で、他は1T・2T・5T・10T・11Tで散見される。II式主体。
晩期安行・姥山式	前回は後期安行式と同様の傾向だったが、今回は全体的には少量である。弧状貝層の途切れる2T、貝層内側の5Tでややまとまって出土した。
大洞式系	前回同様に少量の出土だが、今回は5TでC1式系が3点出土した。
関西系晩期	前回同様に少量の出土だが、今回は2Tで櫛原文様の鉢が出土した。

検出面までの遺構調査分を含め、順を追って説明する。

1 T (第12図1~7、図版7)

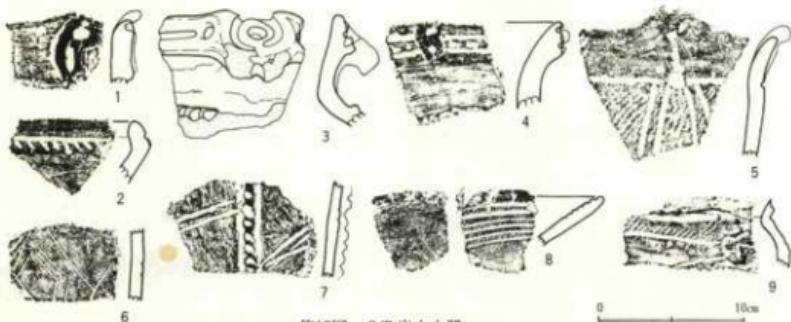
加曾利B式や曾谷式、後期安行式が少量出土したが、主体は検出された遺構群の帰属時期と思われる堀之内式である。1~3は堀之内1式である。その特徴から1・2は綱取式と類縁関係のある古段階、3は新段階となろう。4~6は堀之内2式である。4は磨消を伴う幾何学文が描かれる。5は口端部内面に沈線による区画文を有す。6は口端部が押捺されくぼみ、口端部内面に隆起線の貼付文がある鉢である。7は加曾利B3式で、大波状口縁であろう。



第12図 1T 出土土器

3 T (第13図1~9、図版7)

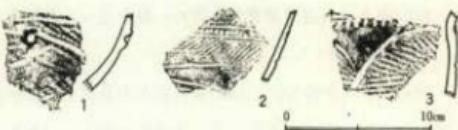
堀之内式が主体で、他には加曾利B式が少量出土している。堀之内1式新段階のSI-2の検出位置である。1~7は堀之内式である。1~5は1式古段階に比定できるもので、2・4は西関東系、他は綱取式系と思われる。3は胴部で大きく膨らむ器形となろう。6は1式新段階あるいは2式、7は1式新段階に比定されよう。8は口端部内面に文様帶をもつ加曾利B1式の鉢、9は口頸部以下が最も膨らむ器形で、加曾利B2式に比定されよう。



第13図 3T 出土土器

1 T・3 T 拡張区（第14図1～3）

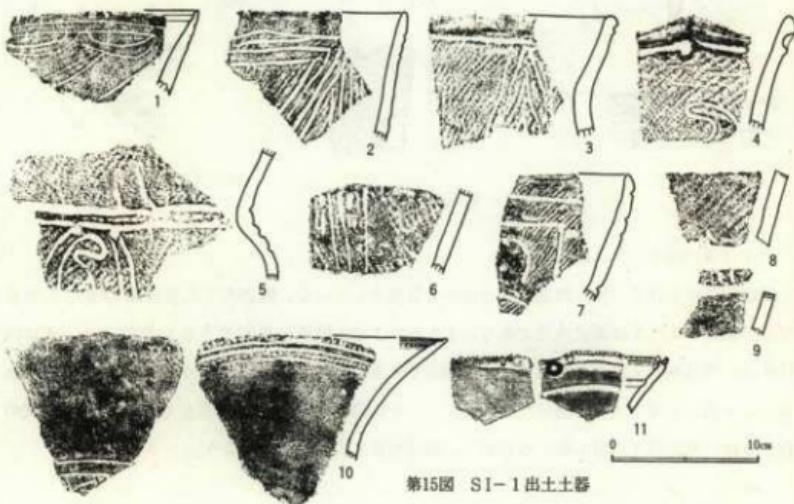
時期的傾向は1Tと同様である。1は堀之内式、2は加曾利B2式、3は加曾利B3式あるいは曾谷式の胴部である。



第14図 1T・3T 拡張区出土土器

SI-1（第15図1～11・第30図1、図版7）

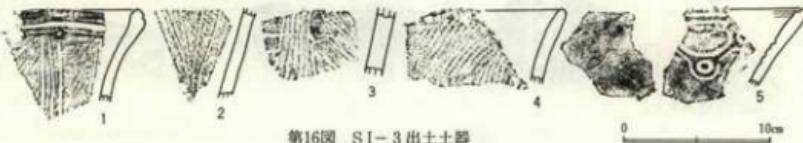
検出面の埋土上面や貝層中に包含されたもので、帰属時期と考える堀之内式を主体とするが、加曾利B1式まで混入する。1～10は堀之内式で、1・7・10・第30図1が2式、他は1式であろう。4・5が古段階で、他は中段階以降と思われる。8・9も堀之内式と思われるが、上端の接合面に8は斜めの隆起線、9は竹管による沈線が焼成前に付される。10は大きく上半部が開く鉢、第30図1は口縁部を欠損するが、鉢であろうか。11は加曾利B1式の浅鉢である。



第15図 SI-1 出土土器

SI-3（第16図1～5、図版7）

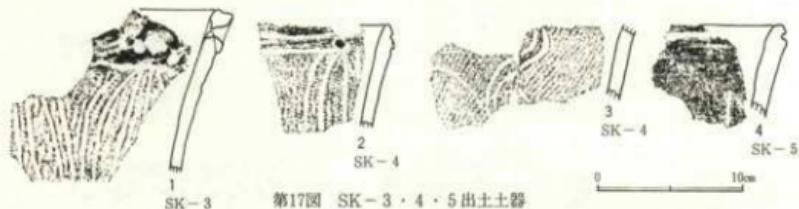
検出面埋土中の資料で、遺構帰属時期の可能性がある堀之内式を主体とする。1～4は古段階を含まない1式であるが、いずれも文様構成などが不明であるため、中段階以降としておく。5は堀之内2式あるいは加曾利B式の鉢である。



第16図 SI-3 出土土器

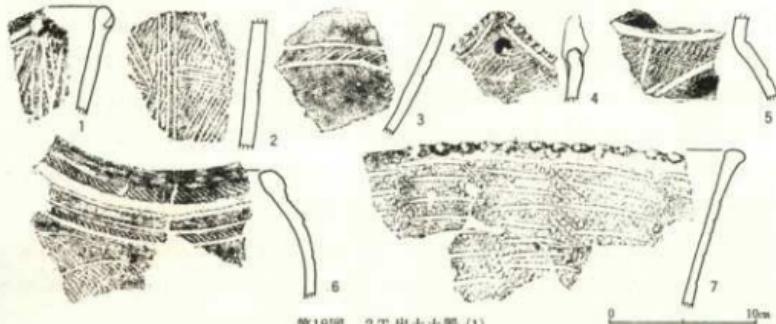
SK-3・4・5（第17図1～4、図版7）

いずれも検出面埋土中資料で、すべて遺構帰属時期の可能性のある堀之内1式だが、1・2が中段階と思われる他は細別できない。1はSK-3、2・3はSK-4、4はSK-5よりの出土である。



2 T（第18図1～第19図28、図版7）

加曾利B式を主体とし、次いで晩期前半の土器群が少量ながら、良好な資料を提供している。他に堀之内式、曾谷式、後期安行式が出土している。1・2は堀之内式で、集合沈線間の充填から新段階と思われる。3～5は加曾利B式の精製土器で、3は1式、5は算盤玉の器形の2式、4は3式である。7・10は加曾利B式の粗製土器で、10は2式、7は3式である。6・8・11～13・15～18は後期安行式である。8が2式の粗製土器である他は、精製土器である。6・12は1式で、6は胸部上半の櫛掛け状入組文が特徴的である。13は帯縄文の状態からすると、曾谷～安行1式であろうか。15～18は2式で、刻み目の付く細隆帯、貼瘤が認められる。15と18は台付鉢になろうか。14・19～29は晩期前半の土器群である。14は2式系譜の3a式で、三角連結部に連続して豚鼻状貼瘤が付くが、綫長の上部は下半が突出する。19～25は玉抱き三叉文や三叉文、入組文などが特徴的で、一部には磨消が認められる。このうち19・22・24は3a式で、19は鉢、21・22は浅鉢である。21・28は3b式で、28（粗製）の枠状区画間に偏平な貼瘤が付く。他は3a～3b式としておく。27は外頸頭部が縄文帯となる。29は関西系晩期の鉢で、櫛原文様成立期の相対ジグザグ文が認められるが、施文順序などに本来のものと異なりをみせる。この文様モチーフは関東地方では稀少例だが、安行3b式に併行しようか。



第18図 2T出土土器(1)

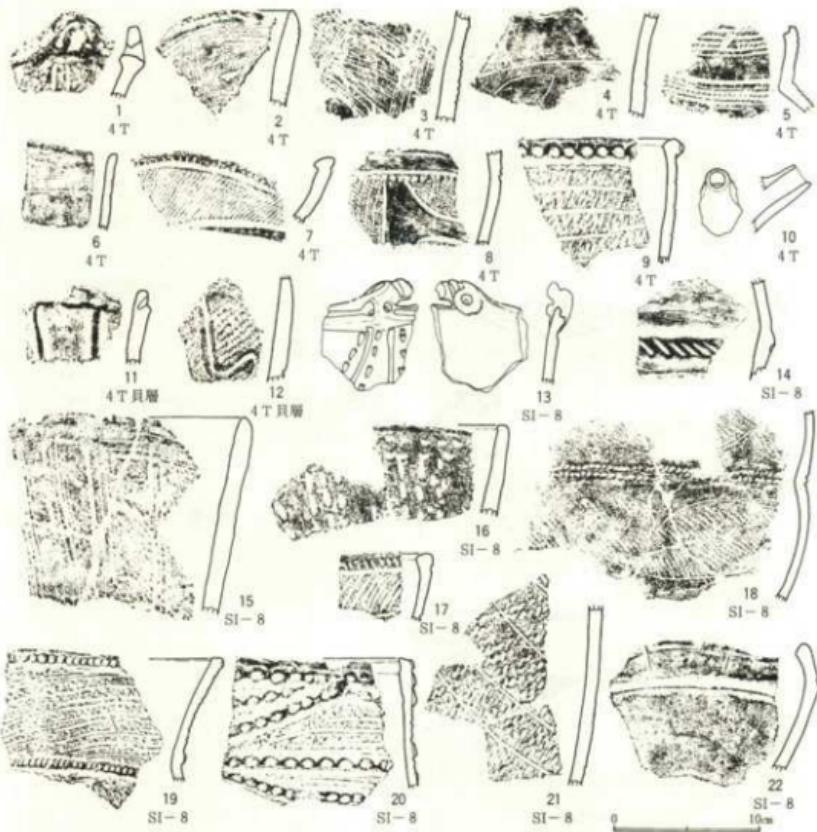


第19図 2T 出土土器(2)

4T・SI-8 (第20図1~22・第30図2~5、図版8)

4Tは貝層の上面までと、北壁に沿って一部を掘り下げる範囲の資料である。従って、堀之内式期と考えられる貝層や、以下の包含層から得られた資料は少量である。全体では加曾利B式を主体的に、堀之内式・後期安行式も少量出土しており、貝層からは微量の堀之内式が出土した。1~10・第30図4・5は4T出土である。1~5は堀之内1式で、1を除き新段階である。4・5は同2式で、4は口縁部が開く鉢、5は壺様の特殊な器形で、内面に蓋受け様の縦を有す。6~9・第30図4・5は加曾利B式である。6は1式、7・8は2式である。7は浅鉢、8には「つ」字文の系譜がみられる。第30図4・5は2式の鉢である。10は堀之内~加曾利B式の注口部である。11・12は貝層出土の堀之内1式で、12は中段階以前、11は新段階である。

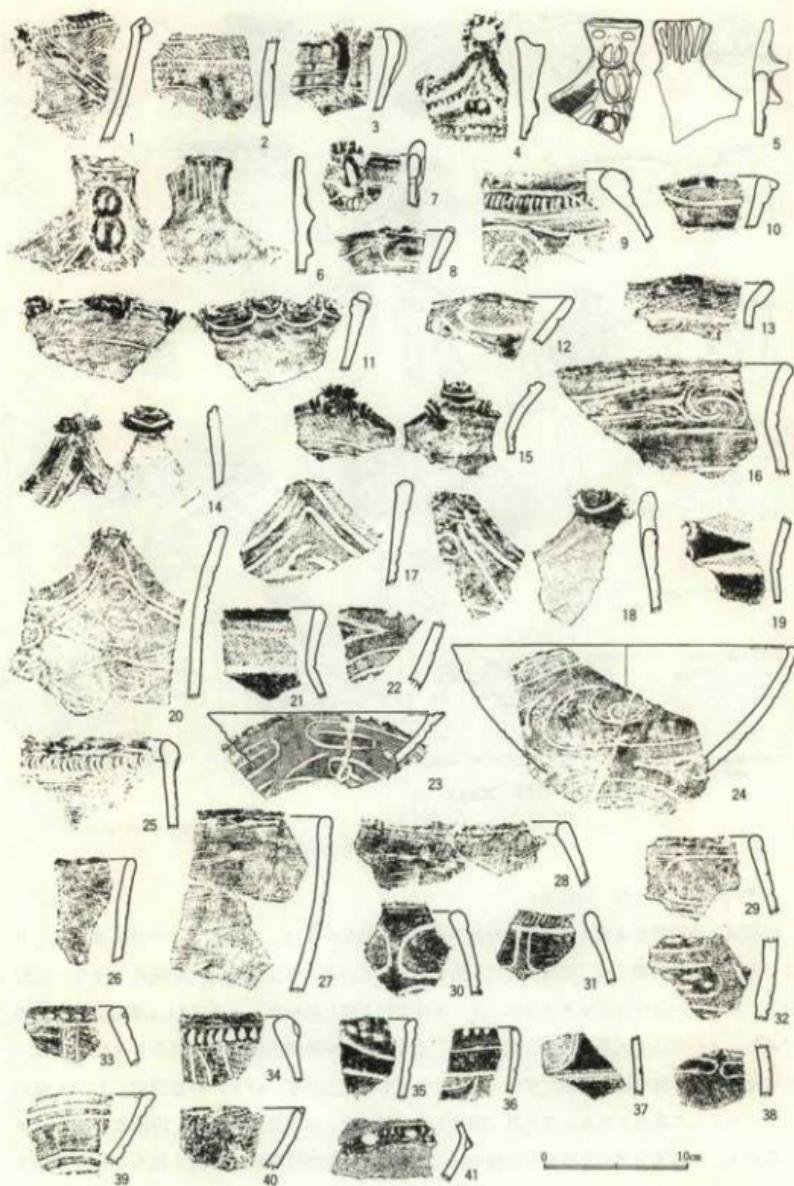
SI-8からは混入したと思われる堀之内式が少量で、主体的には加曾利B2・3式がみられる。13~16・第30図2・3は堀之内1式である。13は列点文が施されるが、突起が該期の特徴である。14は西関東系である。15・16は新段階で、集合する列点文と沈線文が文様帶を構成する。第30図2は西関東系の1式、3も1式であろう。17・19~22は加曾利B式である。17は3式の精製、20は縦線文が口縁部以下にも付される2式、19は3式の粗製土器である。18は括れ部の複列結節沈線を境に弧状入組文が二段構成となる曾谷式、あるいは安行1式になろうか。



第20図 4T・SI-8出土土器

5 T (第21図1~41、図版8)

晩期前半土器群を主体とするが、今回の調査地点のなかでは、本トレンチで最も多く出土している。他に加曾利B式、後期安行式が少量出土している。1は口端部の貼瘤などから、加曾利B3式あるいは曾谷式であろうか。2・3は安行1式と思われる。4~41は晩期前半土器群である。4~6は2式系譜の3a式である。4は波頂部や隆帯上に幅広な刻み目を付す。5・6は縦長の豚鼻状貼瘤が連続して付くが、5の下半は突出する。いずれの波頂部にも、人面がデフォルメして表現される。7~21・35は玉抱き三叉文、三叉文、入組文、円圏文、ステッキ状孤線文、列点文などの文様や、貼瘤や貼付隆起線に特徴づけられ、磨消を伴うことが多い3a式以降の精製土器である。7・9は安行3a式で、9は口端部に紐線文が巡る。9は安行3a式あるいは3b式で、8・10~20は3b式(姥山式)である。10・11などは浅鉢と思われる。

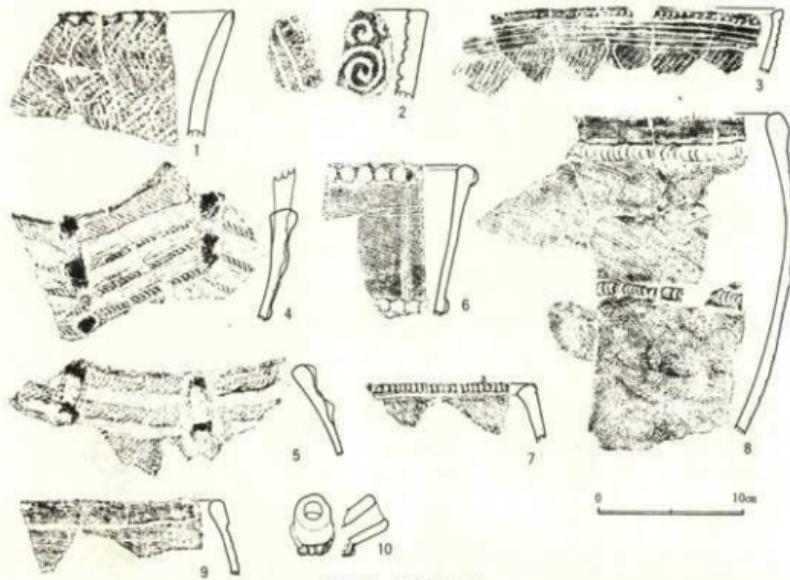


第21図 5T 出土土器

14・17~20は安行3b式(姥山式)の大波状口縁となるが、このうち18~20は姥山式としてよいであろう。14・17は明瞭な沈線そのものの描出と、文様構成に前浦式への系譜がうかがえる。21は外傾する頸部に縄文帯が認められる。22~24は大洞C1式系で、いずれも鉢であろう。ただ磨消処理は丁寧でなく、縄文施文部が突出しない。39は沈線文で構成される鉢で、大洞BCあるいはC1式か。25~38は安行3a式以降の粗製土器で、枠状区画文のある29~32・38、条線の26~28、細密沈線充填の36・37は安行3b式(姥山式)である。40・41は無文の鉢である。

7T(第22図1~10・第30図6、図版9)

堀之内式を主体とし、後期安行式がこれに次ぎ、加曾利B式も少量出土した。堀之内1式は本トレンチで検出されたSI-6で多くを紹介するので、ここではそれ以外を記載する。1・2は堀之内2式である。3は口端部の刻み目以下の沈線帯が稀である。加曾利B3式あるいは曾谷式であろうか。4~10、第30図6は後期安行式である。4・5は帶縄文と継長の貼瘤が特徴的な1式精製土器で、4は純文帯が4条ある大波状口縁である。6~9、第30図6は粗製土器。6・7・第30図6は1式で、6には2式につながる継沈線がみられる。8・9は口縁部が内傾する2式で、9はあるいは3a式までの可能性があろう。10は2式の注口土器の注口部である。



第22図 7T 出土土器

8T(第23図1~10、図版9)

出土土器のはほとんどが堀之内式で、1式が主体となる。5・8に2式の可能性がある他は、1式である。6は古段階、1は渦巻沈線文を口縁部区画の単位文とする西関東系の中段階、2・

4・10は中段階以前と思われる。10はP 1からの出土である。7は口唇部がS字状にねじれ、端部以下には、整った沈線で区画された丁寧な磨消が施される。新段階であろうか。



第23図 8T 出土土器

9T (第24図 1～5)

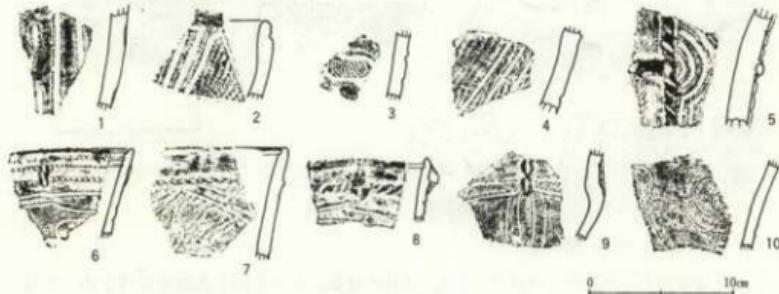
耕作が深くおよんでいたために少量の出土で、図示したもの以外は摩耗の著しいもの多かった。1から4は後期安行式で、2は2式、4は1式である。5は安行3a式であろう。



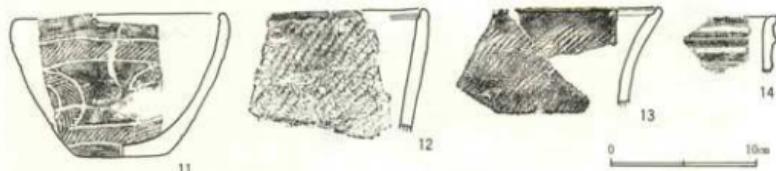
第24図 9T 出土土器

10T (第25図 1～第26図14、図版 9)

貝層およびSI-7の上面までと、トレンチ西壁に沿って掘り下げた範囲の資料である。堀之内式を主体的に出土した。他に称名寺式1片、後期安行式が少量出土した。1は貝層下の包含層から出土した称名寺II式である。2～13は堀之内式で、2～5は1式である他は、口端部内面の稜線、「8」字貼付文、刻み目付き起線、磨消が発達した幾何学的構成の区画文などが特徴的な2式である。このうち11は鉢である。14は安行2式の台付鉢であろう。



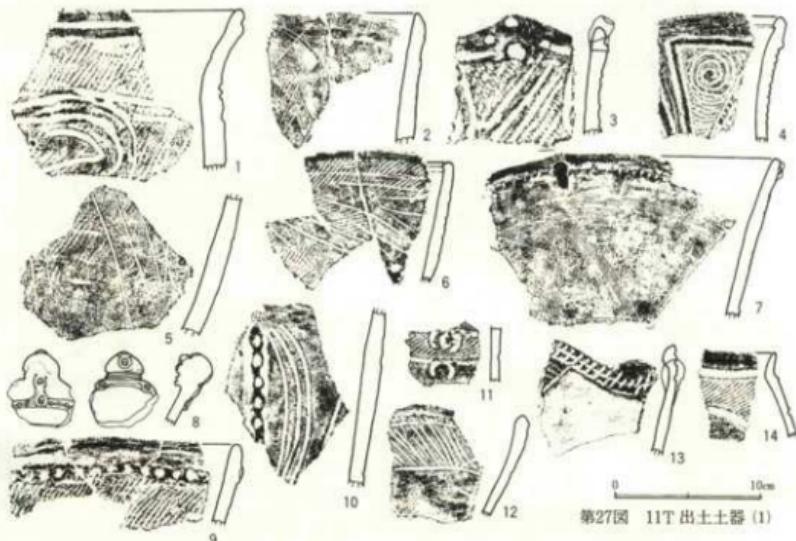
第25図 10T 出土土器 (1)



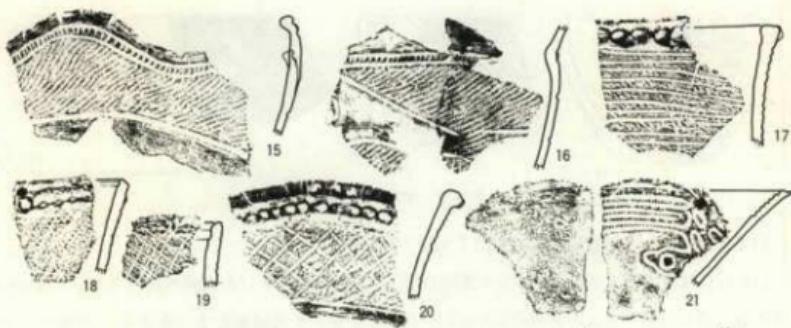
第26図 10T 出土土器(2)

11T (第27図1～第28図21・第30図7～10、図版9)

11Tは貝層検出面までと、トレンチ南壁に沿って貝層を掘り下げた範囲の資料である。貝層以下の包含層や貝層中では堀之内式が主体的に出土したが、2式にまとまりがある。貝層より上層では堀之内式～後期安行式が出土するが、上層になるにつれて漸次、新しいものが主体となる傾向がある。1～10・第30図7～9は堀之内式である。1～5・第30図7は1式で、1・3は太沈線から古段階、4・5・第30図7は新段階と思われる。6～10は2式である。6は縄文を充填しているが、必ずしも区画内に施されない。7・第30図8は口縁部の隆起線以下に幾何学的構成の文様帶がつくられるが、7は沈線だけによる描出である。8は小形深鉢の口端部に付く突起だが、加曾利B1式まで継続するものである。10は凹み付き隆起線が垂下するが、胸部文様帶の中軸上に付されよう。11～21・第30図10は加曾利B式で、11～16・21は精製土器である。11・13・21は1式で、21は浅鉢である。14・16は2式で、14は算盤玉形の鉢である。12・15・第30図10は3式で、第30図10は内屈する口縁部に「つ」字系譜の文様や弧線文が施され、刻み目付き隆帶以下には斜条線が施される。17～20は粗製土器で、19・20は2式である。



第27図 11T 出土土器(1)



12T (第29図1・2)

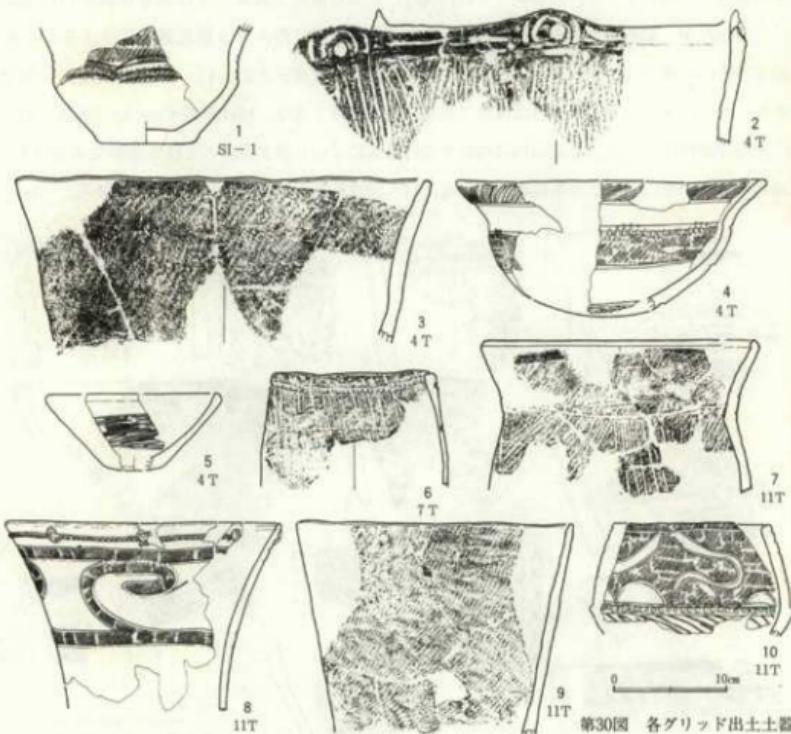
少量の出土で、摩耗したものも認められた。堀之内式、加曾利B式、後期安行式が出土している。

1はB1式の鉢、2は安行2式の精製土器である。

第28図 11T 出土器 (2)



第29図 12T 出土器



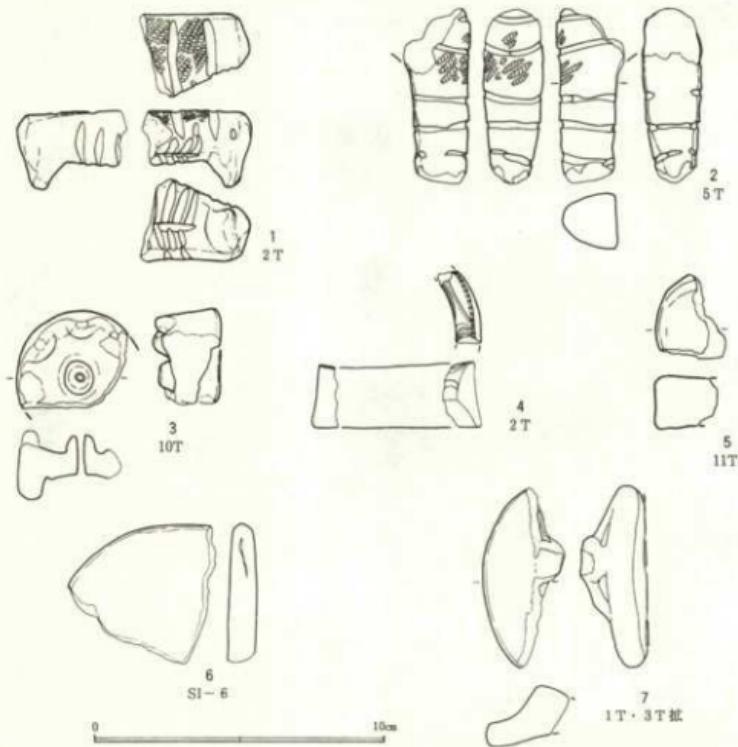
第30図 各グリッド出土土器

3. 土製品（第31～33図、図版13、表3）

今回の調査で出土した土製品は、土偶2点、土製耳飾3点、蓋状土製品1点、板状土製品1点、土製円盤22点、土器片錐14点である。ここでは、土偶～板状土製品までの土製品と、土器片利用の再生品である土製円板、土器片錐にわけて簡略に述べ、属性を表3で示した。

（1）土製品（第31図1～7、図版13）

1・2は安行式のみみびく土偶で、1は左手、2は右足である。時期的特徴のある文様を施す部位ではないため決め手を欠くが、いずれも3a～3b式と考えられる。3～5は耳飾である。3は中心に穿孔がされ、周縁に貼瘤が巡らう。4は滑車形で、端部と内面に沈刻した文様が施される。いずれも晩期前半に比定できるか。5は素文のため、後期以降としておく。6は後期前半の蓋状土製品で、つまみは複数か。7は板状土製品で、表裏ともミガキが丁寧である。欠損のため不明だが、土製円板の可能性はあろうか。出土遺構から堀之内式期と考えられる。

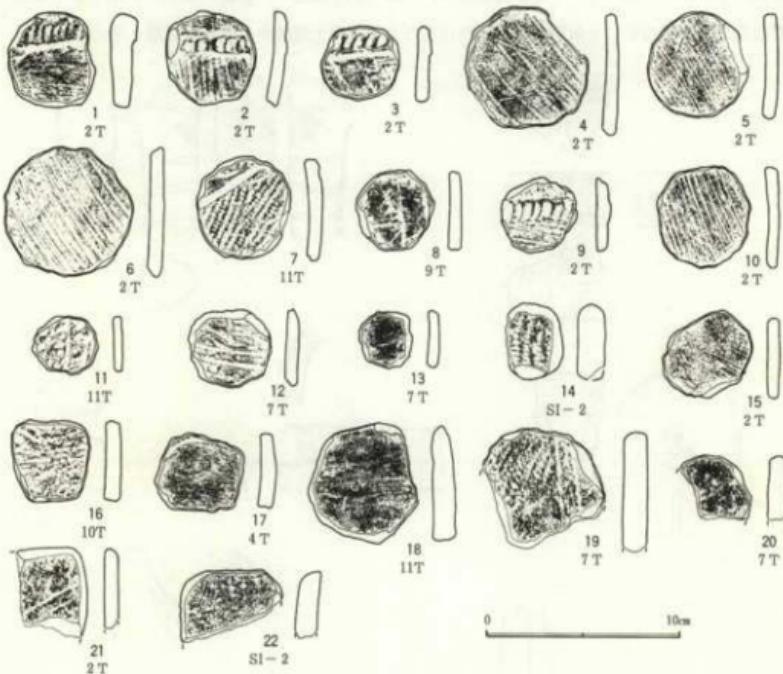


第31図 土 製 品

以上、土偶については従来の13点（山本 1989）に2点を追加した。その他は前回の報告資料（野村 1973）に追加するもので、耳飾は3点を追加し6点、蓋状土製品は1点を追加し7点となつた。また新たに、板状土製品が1点出土している。

(2) 土製円板 (第32図 1~22、図版13)

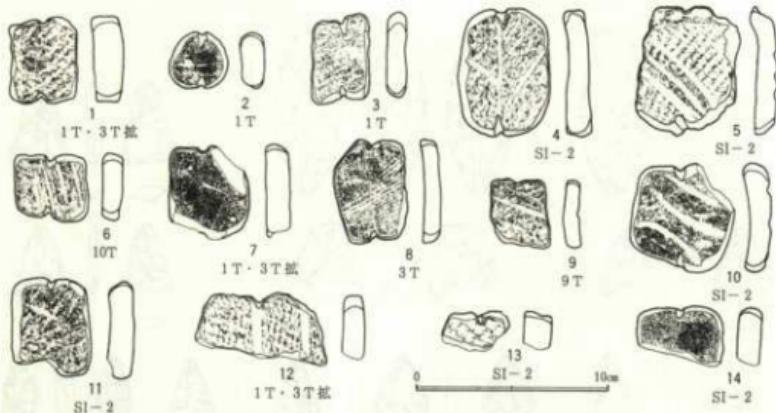
22点が出土したが、形状や計測値にばらつきがある。このうち時期の判別したものは堀之内1~安行式で14点を数えるが、時期的には前回の報告資料9点の範疇と思われる。少数の堀之内1式と加曾利B式を除き、10点が安行式粗製土器となるが、これらはいずれも円形に仕上げられ共通性がある。5を除き、薄く曲率の小さい土器上半部を使用しているが、製作にあたり選択がはたらいたのであろうか。



第32図 土製円板

(3) 土器片鍤 (第33図 1~14、図版13)

前回の調査では報告されなかつたが今回は14点出土している。堀之内式がほとんどすべてと思われる。観察可能な1~10では、素材となった土器の正位軸に対して直交して切り込みを入れたもの6点(3~7・9)、平行するもの2点(1・2)、斜めのもの2点(8・10)となる。



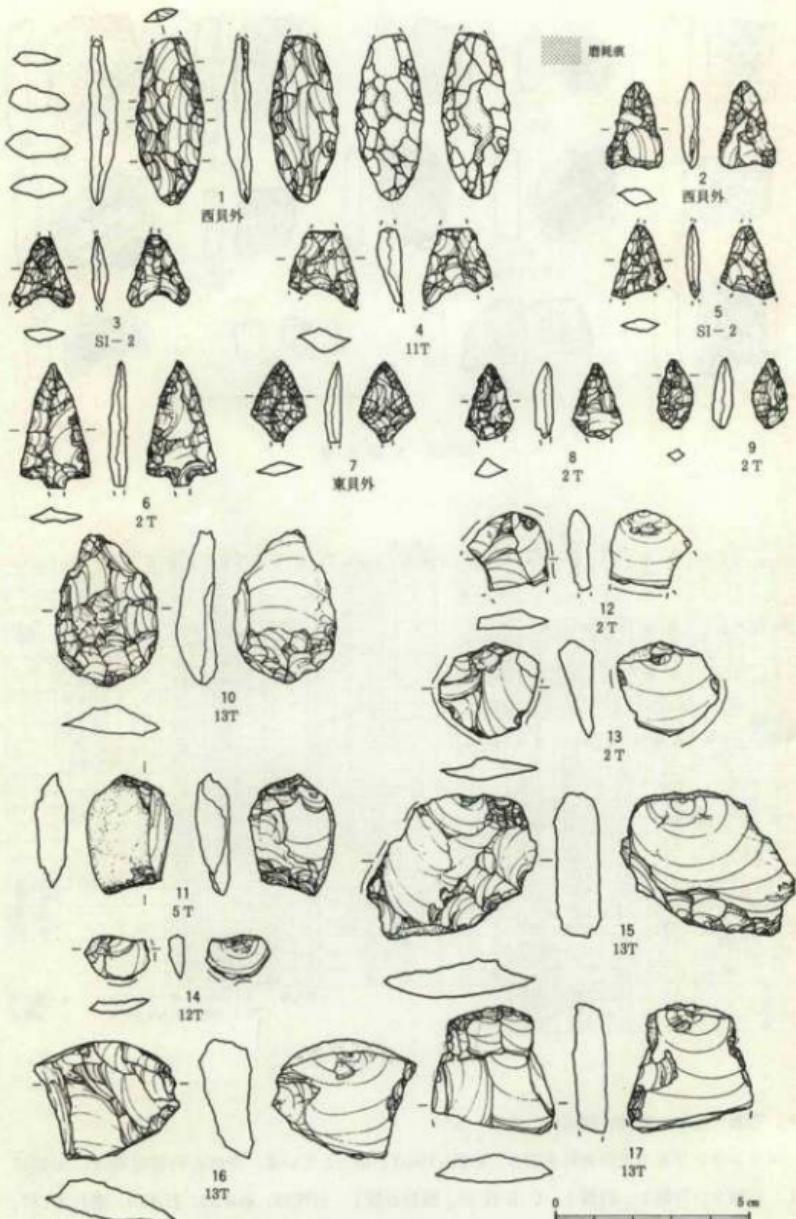
第33図 土器片錐

土製品 標印No.	注記No.	(cm)	(cm)	(g)	土製円板 標印No.	注記No.	(cm)	(cm)	(g)
標印No.	注記No.	種別	長さ	幅	長さ	幅	長短比	重量	分類
1	2 T-66	土偶	2.7	3.6	19.9	安行3a~3b	1	2 T-65	A1 安行粗製
2	5 T-3	土偶	6.0	2.4	25.1	安行3a~3b	2	2 T-20	A1 安行粗製
3	10 T						3	2 T-66	A1 安行粗製
4	1 T-3 T						4	2 T-66	6.3 6.0 0.957 (33.4) A1 安行粗製 一部欠
5	1 T-2	耳飾	2.0	1.8	9.4	後期前半	5	2 T-66	5.3 5.1 0.962 23.1 A1 安行粗製
6	SI-6-17	板状土製品	5.2	1.0	22.8	不明	6	2 T-17	6.6 6.5 0.985 38.0 A1 安行粗製
7	1 T-3 T	耳飾	8.1	2.2	17.7	後期前半	7	1 T-1	5.0 4.9 0.980 25.4 A1 加曾利B
8							8	9 T-1	4.1 4.0 0.979 13.8 A1 安行粗製
9							9	2 T-66	4.0 3.7 0.929 11.3 A2 安行粗製
10							10	2 T-66	5.0 4.8 0.960 17.4 A2 安行粗製
11	1 T-50	土器片錐	3.3	2.9	8.79	6.2 A2 加日の粗製?	11	1 T-50	3.3 2.9 0.929 13.1 A2 加日の粗製?
12	7 T-1		4.2	3.9	9.29	13.1 A2 加日の粗製?	12	7 T-1	4.2 3.9 0.929 13.1 A2 加日の粗製?
13	7 T-1		2.9	2.9	0.966	5.7 A2 ?	13	7 T-1	2.9 2.8 0.966 5.7 A2 ?
14	SI-2-468		6.5	4.8	0.738	48.8	14	SI-2-468	3.8 3.0 0.789 17.9 B ?
15	SI-2-104		6.5	4.8	0.738	48.8	15	2 T-66	4.6 4.0 0.870 13.6 C 安行粗製
16	SI-2-468		6.4	5.3	0.826	46.3	16	10 T-59	4.1 4.1 1.000 18.2 C ?
17	10 T-4		3.9	3.4	0.872	17.4	17	4 T-20	4.6 3.9 0.848 18.5 C ?
18	1 T-27		4.2	4.2	1.000	(28.1) 一部欠	18	1 T-1	6.0 5.6 0.933 44.4 C ?
19	3 T-1		5.2	3.9	0.750	22.9	19	7 T-1	(6.2) (6.0) - (48.5) - 縦之内1 縦 横
20	9 T-1		3.5	3.0	0.867	(10.9) 一部欠	20	7 T-1	(3.5) (3.2) - (11.5) - ? 縦 横
21	SI-2-128		5.4	5.3	0.981	(36.7) 一部欠	21	2 T-66	(4.5) (3.7) - (16.5) - ? 縦 横
22	SI-2-414		4.9	4.0	0.816	(34.3) 半欠	22	SI-2-468	(5.3) (3.7) - (21.1) - ? 縦 横
平均			5.0	4.2	0.855	33.9	平均	4.6 4.3 0.934 19.2	
最大			6.5	5.3	1.000	48.8	最大	6.6 6.5 1.000 44.4	
最小			3.8	3.0	0.736	17.4	最小	2.9 2.8 0.789 5.7	

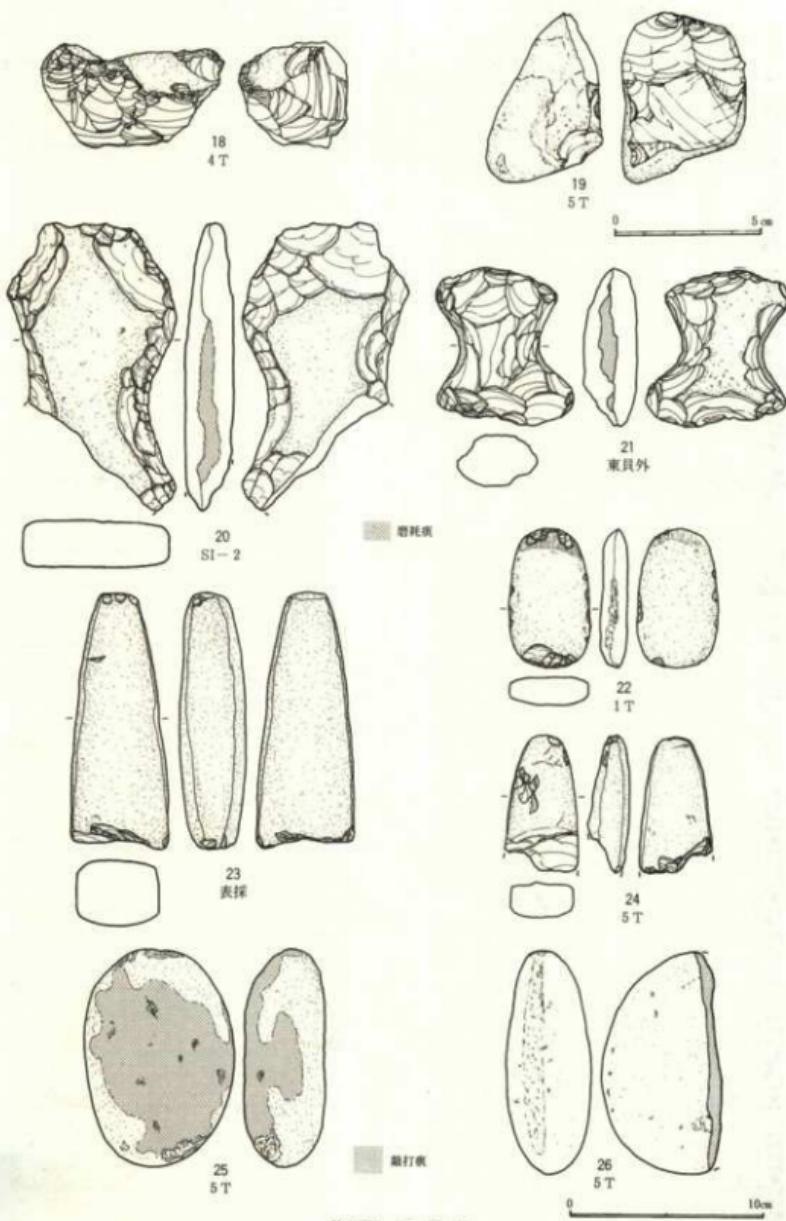
表3 土製品属性

4. 石器 (第34・35図、図版14、表4・5)

コラムサンプル出土の資料を除き、総数1,196点が出土している。全体の石器組成は、尖頭器1、石錐9、石錐1、削器1、U-R-f1 26、楔形石器1、石核29、剥片20、石斧20、磨石類127、石皿18、叩石9、石棒類11、砥石3、軽石製品37、礫 880、石製品1、不明2となっている。



第34図 石 器(1)



第35図 石器 (2)

器種	虎杖	安山	多安	玄武	閃綠	石斑	蛇紋	黑曜	砂岩	燧石	粘板	珪質	頁岩	ナメ	綠泥	矽灰	玉髓	レキ	石英	綠片	矽片	ホル	鈍石	リモ	ビン	石閃	不明	計
9 T U-R 直角 石核 前核 磨耗 砂岩																												2 1 30
10 T 石核 前核 磨耗 砂岩	3						1																					1 1 4 6 20
11 T 石核 U-R 直角 前核 磨耗 砂岩		6	5						2	12	2																	
12 T U-R 直角 前核 磨耗 砂岩	1	2					1																					1 4 6 20
13 T 石核 前核 U-R 直角 磨耗 砂岩 前核 磨耗 砂岩	2	1					2		3			11																30
14 T 石核 前核 U-R 直角 磨耗 砂岩 前核 磨耗 砂岩	5	28	1	2			29		1			2																71
15 T 石核 前核 U-R 直角 磨耗 砂岩 前核 磨耗 砂岩	2	5	2				2		2			1																12
16 T 石核 前核 U-R 直角 磨耗 砂岩 前核 磨耗 砂岩	1	1					1					1																4
17 T 石核 前核 U-R 直角 磨耗 砂岩 前核 磨耗 砂岩	28	31					6	62	6	4	1	55	1	2	9	1	1		1	3	4						309	
18 T 石核 前核 U-R 直角 磨耗 砂岩 前核 磨耗 砂岩							1																					1 2
19 T 石核 前核 U-R 直角 磨耗 砂岩 前核 磨耗 砂岩							1																					1
20 T 石核 前核 U-R 直角 磨耗 砂岩 前核 磨耗 砂岩																												1

出土石器組成表凡例
虎杖=虎杖、安山=安山岩、多安=多孔質安山岩、玄武=玄武岩、閃綠=閃綠岩、石斑=石英斑岩、蛇紋=蛇紋岩、黑曜=黑曜石、燧石=燧石質、粘板=粘板岩、珪質=珪質岩、頁岩=頁岩質
チャーフィート=結晶-綠色矽灰岩、矽灰=矽灰岩、レキ=レキ岩、綠泥=綠色片岩、ホル=粘土岩、ホル+ホルシフス=リオーリセタイト、ビン=ビン岩、石閃=石英閃綠岩

表4 石器 器 成

No.	位	質	器種	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	No.	位	質	器種	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)
1	西貝外	尖頭器	安山岩	(41.7)	16.7	6.9	(5.0)	14	12	T	U-R-f	珪質頁岩	11.1	17.8	4.0	0.7	
2	西貝外	石 鋸	黑曜石	21.6	(10.1)	4.4	(1.1)	15	13	T	削 器	珪質頁岩	36.8	44.2	11.6	17.2	
3	SI-1	2 石 鋸	黑曜石	(18.1)	15.8	4.3	(0.7)	16	13	T	U-R-f	珪質頁岩	31.1	37.6	14.0	13.6	
4	11 T	石 鋸	チャーフィート	(19.9)	(17.9)	6.6	(1.7)	17	13	T	U-R-f	珪質頁岩	33.5	32.0	8.6	10.2	
5	SI-2	2 石 鋸	チャーフィート	(18.9)	(12.1)	3.7	(0.8)	18	13	T	石 鋸	珪質頁岩	36.0	63.4	37.5	76.6	
6	2 T	石 鋸	チャーフィート	(32.0)	[17.9]	9.9	[2.0]	19	5	T	石 鋸	珪質頁岩	57.7	42.2	40.6	106.3	
7	東貝外	石 鋸	チャーフィート	(20.6)	14.4	4.1	(1.0)	20	SI-2	打製石斧	種 砂 岩	(158.1)	(92.7)	25.1	(354.8)		
8	2 T	石 鋸	黑曜石	(19.5)	12.5	5.0	(0.9)	21	東貝外	打製石斧	種 砂 岩	36.7±2.8	79.7	72.4	31.6	161.9	
9	2 T	石 鋸	チャーフィート	18.0	9.1	5.2	0.8	22	1 T	研 刀	研 刀 砂 岩	70.1	41.7	13.9	64.1		
10	13 T	石 鋸	チャーフィート	38.9	25.2	10.5	9.6	23	表 探	磨耗石斧	#67±2.5	130.5	50.3	34.0	371.9		
11	5 T	楔形石器	チャーフィート	30.8	22.5	9.0	7.3	24	5 T	磨耗石斧	燧 灰 岩	(69.6)	(37.9)	(20.8)	(72.3)		
12	2 T	U-R-f	チャーフィート	(10.1)	(21.0)	6.1	(2.3)	25	5 T	磨石 鏊	石英匯岩	111.2	77.8	41.2	548.4		
13	2 T	U-R-f	チャーフィート	24.6	[25.6]	8.9	[4.1]	26	5 T	磨石 鏊	綠 級 岩	(113.3)	(62.3)	(43.7)	(437.4)		

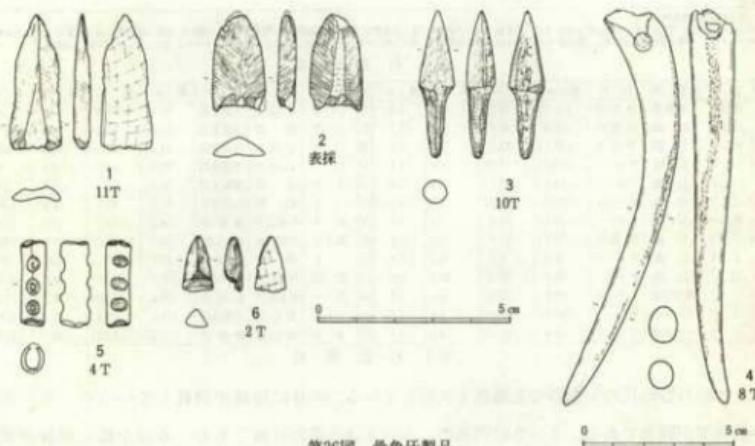
表5 石 器 屬 性

1は旧石器時代の尖頭器で先端部を欠損している。全体に稜線が磨耗しているが、特に器体の中央部が顕著である。2~5は凹基の、6~8は凸基の石鎚である。6は全体に稜線が磨耗している。7の基部の両面には黒色の付着物が少量みられる。あるいはアスファルトかもしれない。9は一見、石鎚のようにも思われるが、先端部が磨耗していることから石鎚とした。10は從来、尖頭器あるいは石鎚などといわれてきたものだが、「里浜貝塚」などで尖頭器様石器とよばれた石器かもしれない。ここでは一応、石鎚としておく。11はチャーフィートの円錐を素材とした楔形石器である。12~17はU-R-fと削器である。15は刃部の角度が非常に鈍角なので、石核とした方がよいかもしれない。18~19は石核で、19にはポジティブな面がみられる。20~21は打製石斧、22は疎斧、23~24は磨製石斧、25~26は磨石類である。26は破損面にも敲打痕がみられる。

5. 骨角牙製品 (第36図、図版13、表6)

図示したものは6点で、属性は表6に示した。1～3は鏃である。1はイノシシ牙製で内面は入念に擦られ、縁辺はきわめて薄く仕上げられる。稜を切る加工が下端に認められるが、基部は欠損する。2は鹿角製で、基部の欠損状態から有茎と考える。3も鹿角製で、段をもつ有茎である。断面形が丸みをおびる。4は鹿角製の棒状加工品とよばれるもので、表裏からの穿孔は対向しない。用途は不明。5は鳥類管状骨製の管状の垂飾で、側面に規則的な抉りが入るが、一部は孔があくまで行われている。6はイノシシ牙製で、器種不明の加工品である。

前回の報告(野村 1973)では鏃4点、刺突具1点、銛1点、笄2点、加工痕のある鹿角2点が出土しているが、今回は貝層をあまり掘り下げなかったため、出土点数はそれほど多くない。図示したもの以外では、人工的なものかどうかは定かでないが、サメ類の椎体の穿孔品がある。他に加工痕のある鹿角4点と、哺乳類の管状骨3点が出土した。また、前回出土例のある貝器は検出されなかった。



第36図 骨角牙製品

標図No.	注記No.	種別	材質	長さ cm	幅 cm	備考
1	11T-2	鏃	イノシシ牙	3.48	1.33	貝層上面。基部欠損。
2	表採	鏃	鹿角	(2.45)	1.37	強く、深い擦痕あり。基部欠損するが、有茎か。
3	10T-58	鏃	鹿角	3.75	0.89	2層。有茎で、段をもつ。
4	8T-4	棒状加工品	鹿角	13.2	1.6	穿孔は対向しない2方向からで、孔径 6 mm。
5	4T-12	管状垂飾	鳥類管状骨	2.17	0.67	側面に抉りが入り、一部は孔があく。
6	2T-68	器種不明加工品	イノシシ牙	1.4	0.79	貝層中一括。

表6 骨角牙製品属性

6. 動物遺体（表7）

確認調査という限られた範囲で検出された資料であるが、それにも関わらず多種、多量の動物遺体が発見され、前回の知見同様に、本貝塚には多くの動物遺体が包含されていることが再認識された。今回は本格的分析を記載するにいたらなかったため、概要などの中間報告を行い、将来に備えたい。なお、種同定とその所見については、軟体動物を当文化財センター 西野雅人、脊椎動物を千葉県立中央博物館 小宮 孟氏にそれぞれお願ひした。

(1) 同定結果

今回、同定されたのは発掘および表面採集と、4T・11T・SI-2の貝層コラムサンプルから得られた資料で、その種名は表7に示した。全体の分析が進めば、新たな種名の追加がされよう。

1. 貝類	3. 魚類
腹足綱	軟骨魚綱
イボキサゴ	板鰓亞綱
カワニナ科種不明	ネズミザメ目種不明
ウミニナ属	軟骨魚綱
ツメガガイ	ニシン目
タカラガイ科種不明	ニシン科種不明
カコボラ	ウナギ目
アカニシ	ウナギ
イボニシ	ボラ目
アルテンスマツムシガイ	ボラ科種不明
アラムシロ	スズキ目
バイ	スズキ属
テングニシ	アジ科種不明
腹足綱種不明	マダイ
二枚貝綱	ヘダイ
サルボウガイ	クロダイ属
イタヤガイ科種不明	サバ属
イタボガキ	カサゴ目
マガキ	コチ
イタボガキ科種不明	カレモ目
イシガイ科種不明	カレイ科種不明
シオフキ	フグ目
バカガイ	フグ科種不明
ミルトイガイ	4. 鳥類
セビシラトリガイ	カモ目
ムラサキガイ	カモ科種不明
シオサザミガイ科種不明	5. 哺乳類
キヌアダマキガイ属	黒長耳
マテガイ	ヒト
カガミガイ	ウサギ目
アサリ	ノウサギ
オキアサリ	Gomphina (Macridicetus) aquilator
ハマグリ	クジラ目
オキシジミ	種不明
オオノガイ	食肉目
二枚貝綱種不明	タヌキ
2. 節足動物	偶蹄目
甲殻綱	シカ
ツツジボ	イノシシ
	Cervus nippon
	Sus scrofa

表7 動物遺存体種名一覧

(2) 動物遺体の概要

今回は、同定した資料が全体の一部であり、また同定したものについても数的処理は貝類の一部が行われているだけである。ここでは以下の類別ごとに、前回報告の内容（金子他 1973）にもふれながら、現段階でのおよその傾向について述べることにする。

貝類

腹足綱12種、二枚貝綱20種が同定された。前回同定され今回みられなかったものには、ウラシマガイ・ナガニシ・アカガイがあげられる。また、キサゴ・ホソウミニナとされたものは、今回のイボキサゴ・ウミニナ属でよいであろう。今回新たに同定されたものとして、腹足綱ではカコボラ・カワニナ科種不明など5種、二枚貝綱ではバカガイ・ミルクイガイなど10種があげられる。

魚類

13種が同定された。ただし、0.5mmの試験フライで水洗分離し選別した試料は、同定されていないので、ハゼ科などの小形種が同定される可能性があろう。前回同定され今回みられなかつたもののなかには、魚骨からは特定し得ないものが含まれているのでふれないと、今回の発掘と表面採集で見つかった資料では、スズキ属とマダイ・フグ科の頻度が、村田川流域の諸貝塚に比べてかなり高くなると予想される。またコラムサンプルの資料では、ニシン科が主体的であるが、村田川流域の諸貝塚のサンプルでは出現頻度の低い、アジ科およびサバ属の頻度がかなり高くなる見込みである。

鳥・哺乳類

両者ともに前回に同定されたものには、不確かなものも含まれるので詳しくはふれないが、鳥類は、前回多くみられたカモ科種不明が同定された。哺乳類は6種が同定されたが、発掘による資料では、イノシシ・シカの成獣の骨が最も多い。ヒトの骨は下顎骨の断片的なもので、出土状況からは埋葬か否か、確認できなかった。

7. 貝サンプル（表8～11）

弧状貝層に設定したトレーンチ内（4T・11T）と、遺構内貝層（SI-1、SI-2）から、計13か所42カットのサンプルを採取した。いずれも後期掘之内式期と考えられる。今回は、表8のコラムサンプルについて、貝類の集計・計測のみ行った。分析は1990年度の菅田高田貝塚で行った方法によった。また各サンプルからは、少量の炭化植物と多量の魚骨も検出されたが、魚類の頻度が圧倒的に高い。しかし現時点では分析作業は未着手で、今後の課題である。

(1) 採取方法

今回扱った資料は、表8に示したように30×30×5cmの垂直コラムを基本としたものである。ただし、SI-2では貝層上面が水平でなかったため、露呈面までの土層を除外したcut 1の容量

	採取法・量	時期	備考
SI-2-A	30×30×5 cm 垂直コラム×5カット	堀之内 1	主体貝なく、多種のまじりの貝の残り良いが1 ～4mm破碎貝も多量 ①・②で小型魚骨多量
4T	30×30×5 cm 垂直コラム×7カット	堀之内	破碎貝主体 ①～④で小型魚骨多量
11T	30×30×5 cm 垂直コラム×6カット	堀之内 1～2	貝少なく残り悪いが、本来は完形が多かったと思われる ①～⑤で小型魚骨多量

表8 貝サンプル一覧

は不足している。なお、未了の資料は、一括や任意で採取したサンプルである。

(2) 貝類の組成比率

表9・10から読み取れるように、4Tと11Tはよく似た傾向を示すのに対し、SI-2-Aはかなり異なる様相である。

4T・11T 個体数、重量ともイボキサゴが最も多く、個体数で94%以上と圧倒的である。他の貝ではツメタガイ・シオフキ・アサリがやや多く出ている。

SI-2-A 貝種は4T・11Tがともに16種にとどまったのに対し、ここでは24種と多数である。個体数ではイボキサゴがやや多いものの、重量は微少である。重量の比率でみると、どのカットでも特定種に片寄らず、多種から構成されていることが特徴である。

(3) 貝類の計測値

現場での観察では、採取地点ごとに違いがあるようと思われたため、計測可能な個体はすべて実施した。このうち比較的まとまって計測可能な個体の得られたツメタガイ・アカニシ・イボニシの腹足類3種、サルボウガイ・ハマグリの二枚貝類2種を表11に示した（出現しない前後の分布域は、省略した）。しかし結果としては、計測値を比較するには試料数が少なく、安定した資料は得られなかった。今後はサンプルサイズを大きくするなど、方法が検討される必要がある。今回はこの5種について現地での所見をあわせ、資料から読み取れるおおよその傾向などを述べるにとどめる。

ツメタガイ 椰査中の所見では4Tに大形が多く、SI-2では小さな個体まであることが記録されていたが、ある程度その傾向を示している。

イボニシ 普通、殻高3.0～3.5cmとされているが、大きな個体が混じる。サンプル以外であるが、最高で殻高5.3cmほどのものがある。

サルボウ 大きさのばらつきがきわめて大きい。

ハマグリ SI-2では小形がまとまっており、4Tでは大きな個体が多かったが、4Tのサンプル中には計測可能な個体がほとんどは入らず、比較できなかった。

11 T	Cut-1		Cut-2		Cut-3		Cut-4		Cut-5		Cut-6	
	個数(%)	重量(%)	個数(%)	重量(%)	個数(%)	重量(%)	個数(%)	重量(%)	個数(%)	重量(%)	個数(%)	重量(%)
イボニチナ ウミコサ属	22 (82)	7.7	12.5	201	86.6	65.7	13.9	383	94.6	79.2	297	369
アカマテガイ	4 (0.3)	19.4	31.4	10	4.3	73.5	23.1	6	1.5	30.5	54.4	1
アカニシニ イガニシニ	0.0	1	0.4	0.6	0.2	1	0.2	3.7	1.1	0.0	0.2	0.9
アムシロ 露足織不明	0.0	3	1.3	0.9	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
キラカワガイ	0.0	0.0	1	0.0	1.7	0.5	0.0	0.0	0.2	0.0	0.1	0.0
マダラ マダラ	0.0	0.0	1	0.4	0.6	0.2	0.0	0.0	0.3	0.1	0.0	0.0
シオアフキ シオアフキ シオアフキ伴	1 (2.6)	23.9	38.7	10	4.3	114.4	34.7	6	1.5	45.8	13.3	1
マダラガイ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
カギミザガイ	0.0	0.0	3	1.3	46.1	1.4	0.2	0.5	131	8.3	23	1
マサゲ	1 (2.6)	6.8	11.9	0	0.0	1.7	0.5	1	0.2	1.8	0.5	0
ハマヅツリ	1 (3.6)	3.9	6.3	3	1.3	7.6	2.4	2	0.5	36.1	10.5	15
オシジニ オシジニ	0.0	0.0	0.0	0.0	1	0.2	1.8	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0
オシガイ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
一枚目織不明	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
合計	39 (39.0)	41.7	100.0	222 (90.0)	329.8 (90.0)	100.0	965 (100.0)	344.6 (100.0)	415 (100.0)	255.9 (100.0)	699 (100.0)	202.9 (100.0)

表10 月類の組成比率(2)

アカニシニ-船高	イガニシニ-船高			サルボウガイ(左)-船長		
	船高(cm)	SL-2-A(%)	SL-2-A(%)	船長(cm)	SL-2-A(%)	SL-2-A(%)
72.5-15.0	16.0	2	7.8	72.5-25.0	4	5.9
25.0-7.5	4 (13.3)	7	13.2	25.0-27.5	1	2.2
5-12.5	4 (13.3)	5	9.4	11.1	25.0-37.5	8
30.0-32.5	6 (20.0)	11	14.3	30.0-35.0	21	27.5-30.0
32.5-35.0	4 (13.3)	10	18.9	32.5-35.0	10	30.0-32.5
35.0-40.0	3 (10.0)	5	9.4	35.0-40.0	3	32.5-35.0
40.0-42.5	1	3.3	7	40.0-42.5	2	4.4
42.5-45.0	3 (0.0)	0	0	42.5-45.0	6	13.3
45.0-47.5	0.0	0	0	45.0-47.5	8	17.8
47.5-50.0	2 (0.0)	1	0.0	47.5-50.0	3	6.7
50.0-52.5	0.0	0	0	50.0-52.5	2	4.4
52.5-55.0	0.0	0	0	52.5-55.0	5	10.2
55.0-57.5	0.0	1	1.9	55.0-57.5	1	2.2
合計	39 (100.0)	63 (100.0)	7 (100.0)	合計	68 (100.0)	49 (100.0)

表11 月類計測値分布

IV 検出遺構と出土遺物

今回は確認調査ということで、遺構の掘り下げは行わないのが基本である。しかし、検出面の遺存状況や遺物の出土状況などで、精査したほうがよいのではと判断される遺構については、必要と思われる段階まで行った。

1. 住居跡

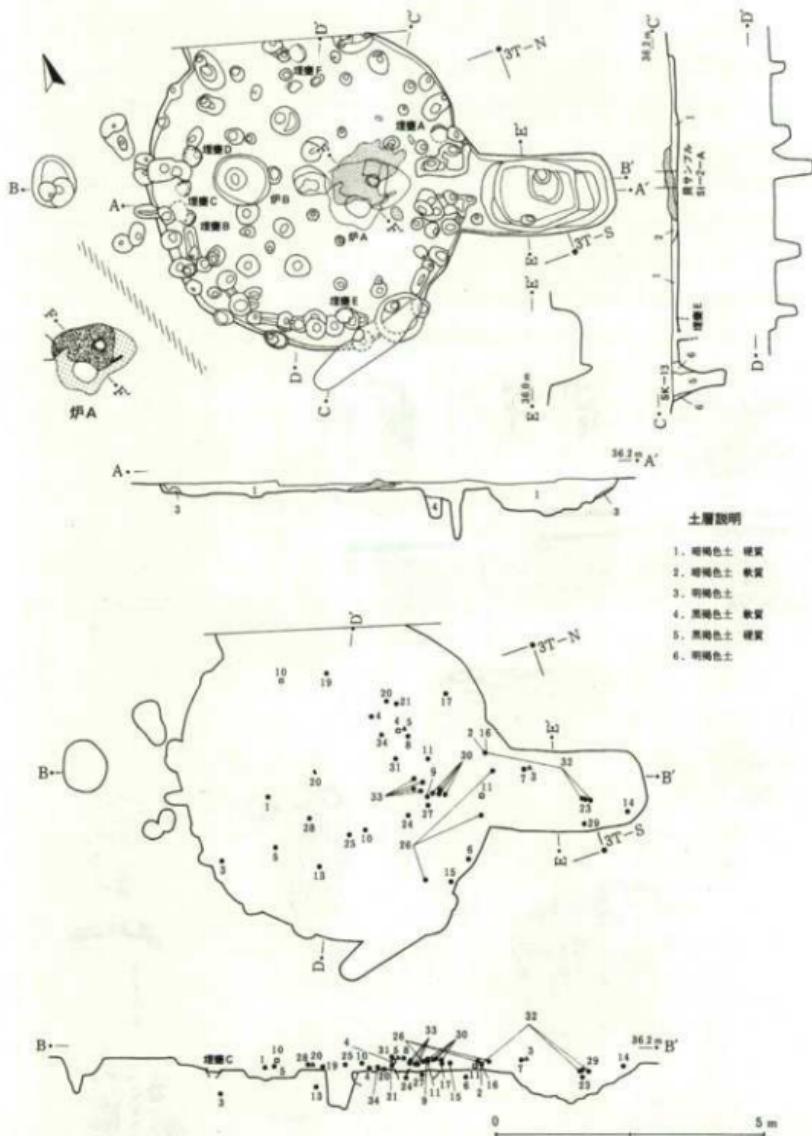
SI-2 (第37~39図、図版5・6・10・11)

ボーリング探査で把握された貝層の性格を確認するため3Tを設定したが、遺構と思われる落ち込みが確認されたので拡張した結果、柄鏡形住居跡が検出された。検出面上約5cmまで耕作がおよんできることと、時期のわかる貝層コラムサンプル採取することを目的として精査した。床面を露呈し柱穴と炉Bを掘るところまで調査を行い、埋壺A~Fの6基と重複する炉Aはそのままのこし、将来調査が行われる場合に備え、砂を入れて埋め戻した。

規模と構造 立替の重複があるので、ほぼ東側に柄部を有す現存するプランで計測するが、内側の円形部で径約6m、奥壁から柄部の中軸上で約8.6mを測り、比較的大形である。北側の調査区外が未調査で、他の住居跡とも切り合っている。柱穴は計80か所以上が検出されたが、中央よりのものを除き多くが壁柱穴構造に伴うであろう。炉や埋壺、柄部に付設する連結ピットのあり方とともに、立替の個々の様子が想定できるが、これは後述する。床面は比較的軟質で、西側の壁際が約10cmほど他より高いが、全体的にそれほどレベル差はない。東側柄部の先端には重複した土坑が掘られ、西側の柄部は浅く立ち上がったためプランは残されず、先端の土坑と連結ピットを認めるだけである。

埋土と貝層 埋土は比較的単純な構成となっており、硬質な暗褐色土である1層がほぼ全域に堆積している。貝層は住居埋土形成中に堆積したもので、土層断面から観察すれば、床面中央部東側の炉Aの上面に、北東方向から投棄されたと思われる。また、掲載した遺物の出土位置以外は図示していないが、貝層堆積範囲より相対的に上層に遺物の集中が認められ、ほぼ同方向からの投棄と考える。図示した位置で貝層コラムサンプルを採取した。

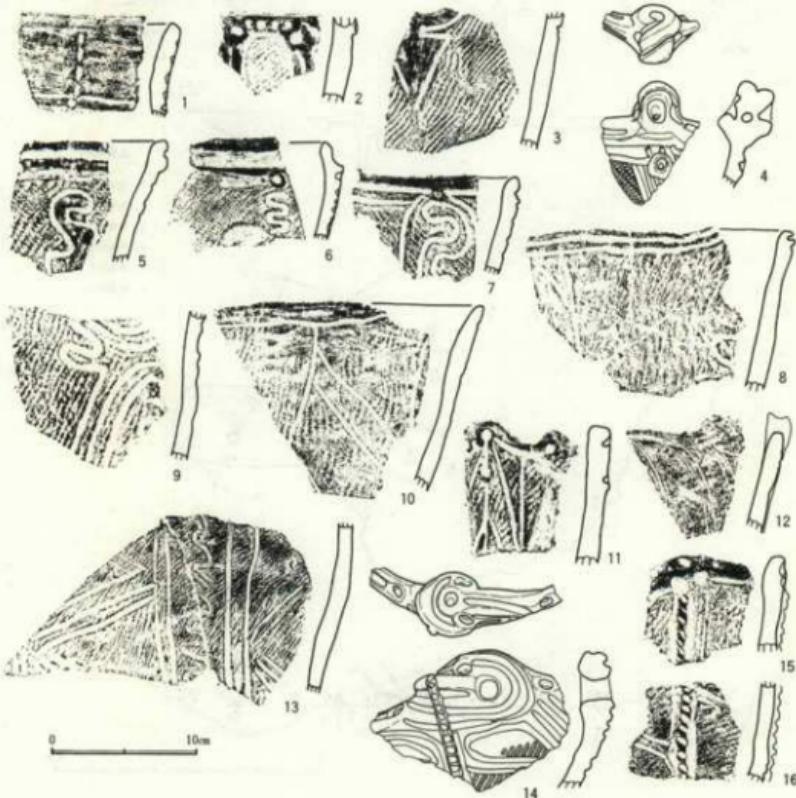
出土土器 (第38図1~第39図34) すべて堀之内式で22を除き、他は1式で古~新段階のものまで混在する。1~8は古段階と思われる。1~6は網取式との強い類縁関係を示す土器である。1は幅広な口縁部無文帯に、縦位の刺突列が施される。3はスペード文が垂下している。4は口端部上にS字モチーフとし、紐をねじったような把手が付く。5は内部を磨消して無文とした底手文が垂下する。6は口端部以下の円形刺突文から、強く蛇行した深い沈線が垂下する。8の沈線は器面にくい込むように強く引かれる。9~11は中段階と思われる。9~11は単沈線の集合で単位文を描出するとともに、縦位に区画する効果をもつ。12は中~新段階のいずれか。13~17・21・23・30は新段階であろう。13は垂下する縦位の文様間を、ジグザグ状の



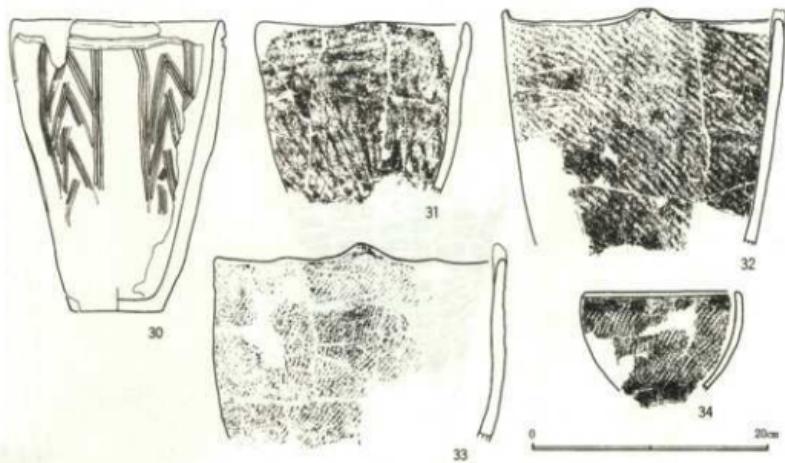
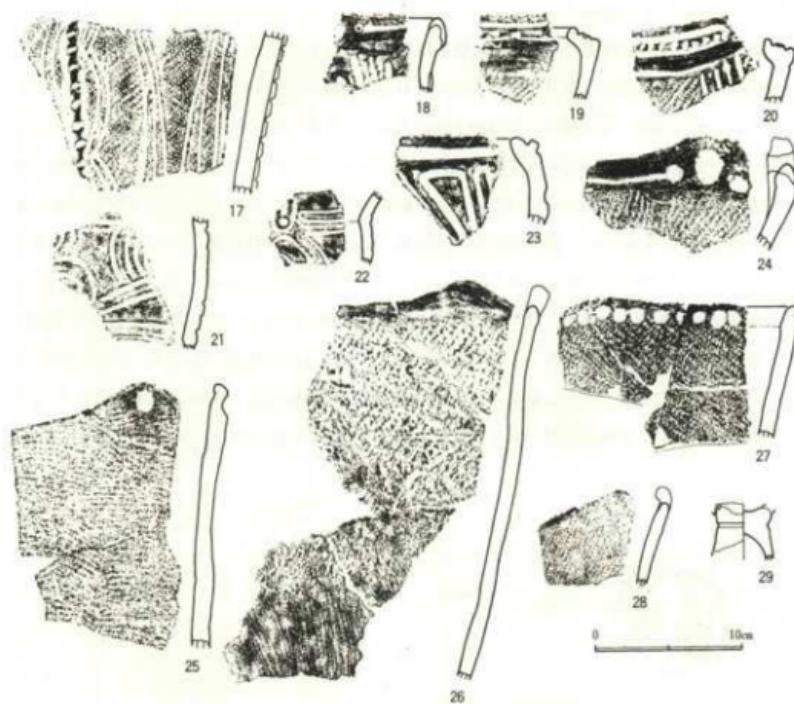
第37図 SI-2 (1)

集合沈線が充填する。14~17は口端部から縦位あるいはやや斜めに、刻み目付き隆起線が垂下する。14は中央に穿孔があり、口端部上には複数の円形刺突文が認められる。中期的なつくりである。30は口端部以下に横位の沈線を巡らせ、これに付着して沈線による帯状区画が、連続山形モチーフを充填して垂下する。横位と帯状区画の沈線は、前者が半截竹管内側を用い立たせ氣味で引いたのに対し、後者は櫛歯状に束ねた施文具を用いる。18~20は西関東系でよいであろうか。19・20はやや幅広で強く屈曲する口端部に、刺突列が認められ、胴部には縄文が施される。新段階であろうか。21は焼成堅微である。29は小形土器の脚部である。31は器面整形が粗く、凹凸が顕著である。32・33は4単位の突起を有す。34は小形の鉢である。

遺構の時期 ほとんどすべてが堀之内1式で、古~新段階まであるが、ほぼ同一位置で建替が想定される住居なので、最終的な廃絶時期は新段階と考えるのが妥当と思われる。



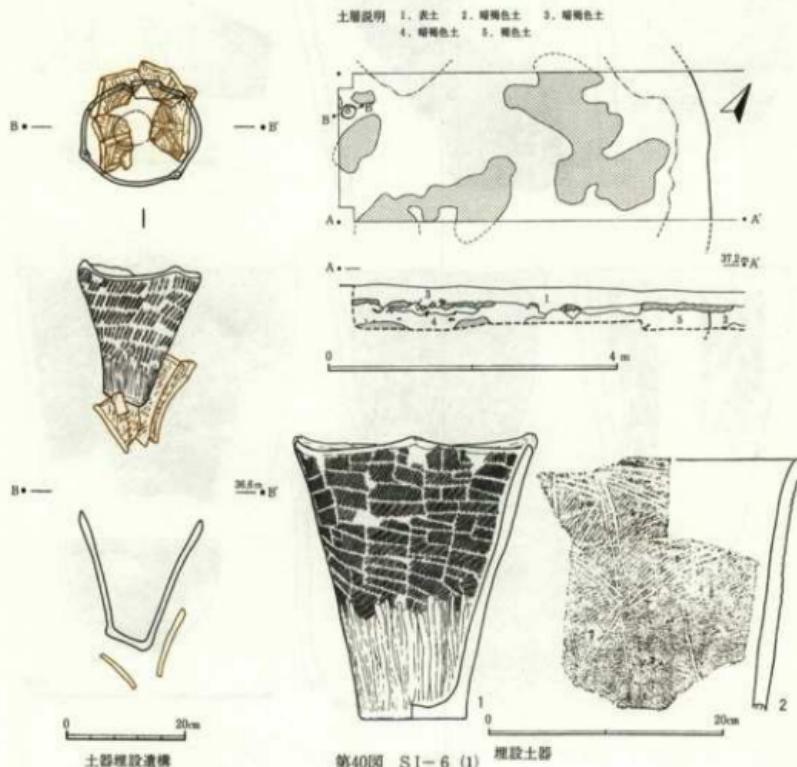
第38図 SI-2 (2)



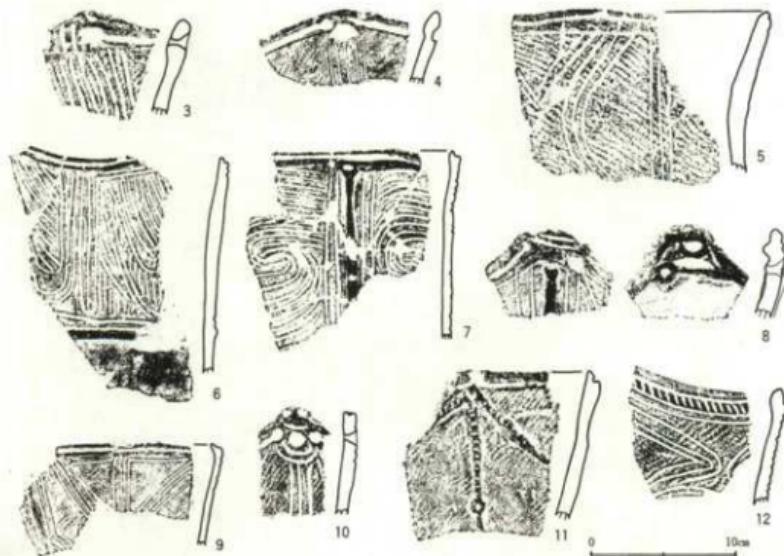
第39図 S I - 2 (3)

SI-6 (第40~43図、図版6・12)

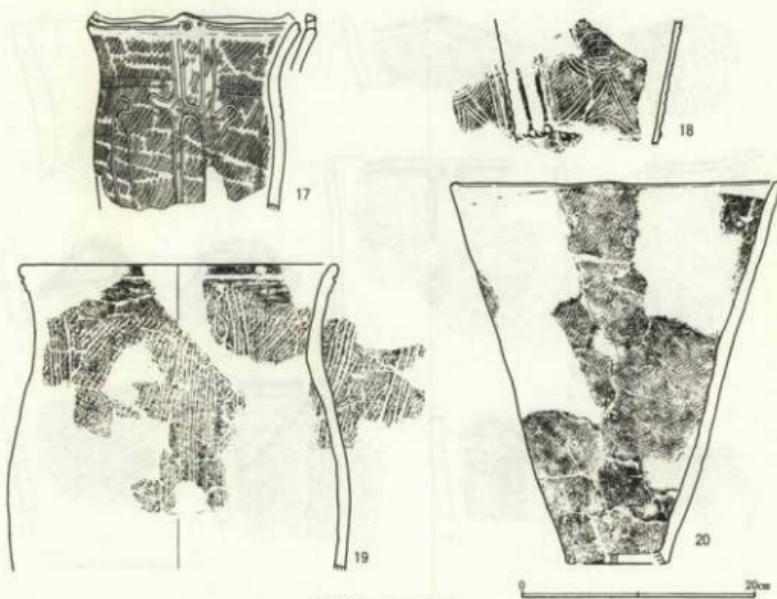
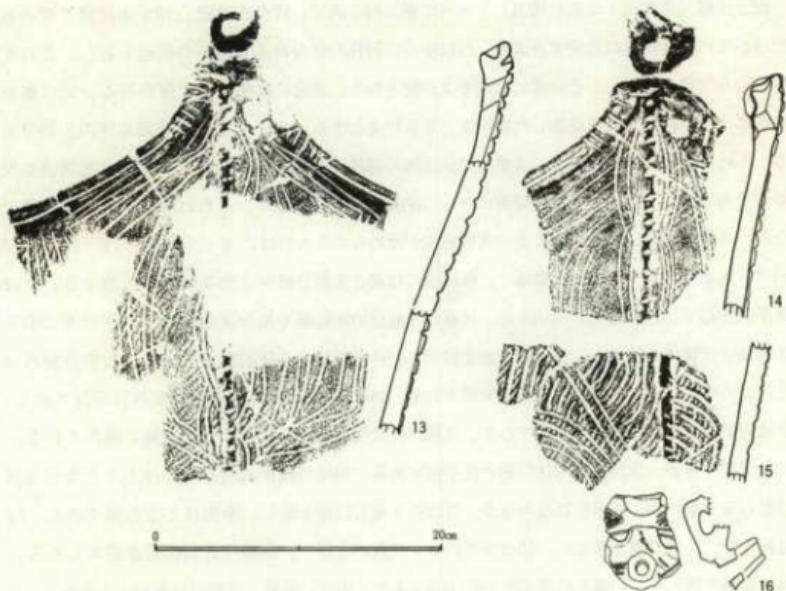
7T内のボーリング探査で検出した貝層を精査したところ、住居跡内堆積貝層であることが判明した。本地点周辺は落花生がつくられており、深耕されないとと思われたので、掘り下げは、トレンチ内に限って貝層の上面範囲を確認するところまでとした。貝層は大きなもので2ブロック、小さなもので3ブロック認められたが、いずれもキサゴの比率の高い混土貝層である。また、耕作による擾乱がおよばない表土下約20~30cmには、富士新期テフラが含まれる明褐色土層の堆積が認められ、住居跡埋没後の堆積と確認できた。検出面にいたるまでに多量の堀之内1式土器が埋土中に検出されたが、特に第40図の微細図にあるような土器埋設が、貝層間の有機成分が腐朽した結果と思われる黒色土層中に認められたため、耕作面との差を考慮して記録後取り上げることとした。土器の埋設状況は、土中に同一個体を打ち割った2と他の小破片を五徳状に設置し、1の3単位になる波状線の土器をはじめ込んだものと思われる。管見の限り類例を知らず、目的は不明である。遺構の時期は土器から堀之内1式新段階と思われる。



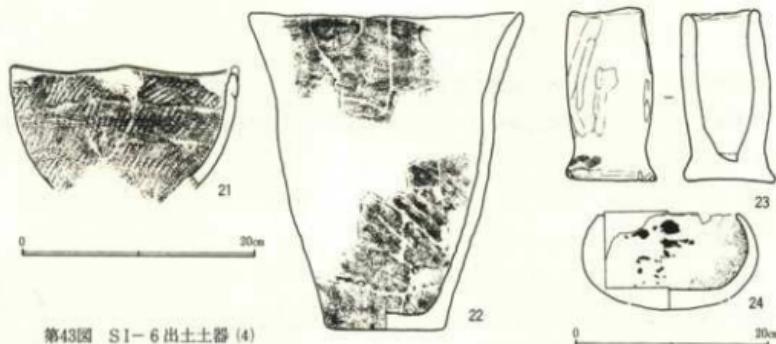
出土土器（第40図1～第44図24）　すべて堀之内1式で、17が古段階、19が中段階？である他は、すべて新段階に比定できよう。17は中心に円孔の穿たれた3単位の突起を有し、これを単位に丘状文が垂下し、その間には蕨手文が配される。頸部には横位の沈線が巡る。19は集合沈線によって描出される退化した蕨手文？を単位文とする。1・2は土器埋設遺構の土器である。1は口端部に稜を有すが、3単位の波頂部の突起に集約される。縄文施工後の器面調整が顕著である。2～5は、集合沈線間にさらに沈線を充填させるが、これは横位の区画文効果となる。文様帶下端に隆起線による一次区画文が認められるものは、6・7・9・12～15・18があげられよう。6・7は同一個体で、区画内には集合沈線で幾何学的な图形を充填する。9は薄手の土器で、口縁端部が内屈する。区画内は縦位の隆起線や集合沈線間を、ジグザグに垂下する集合沈線で充填する。13～15は波頂部から刺み目の付いた隆起線が垂下し、縦位分割の単位になろう。区画内には集合沈線が充填される。18は文様帶下端の隆起線に刺み目が付される。磨消の伴う3本の隆起線が垂下するが、区画内には幾何学的な图形が集合沈線で描出される。16は欠損するが、注口土器の注口部と把手部である。20は口端部に緩やかでゆるやかな突起状の膨らみをもつが、4単位になろうか。21は折り返し口縁を呈し、小波状となる鉢である。22は無文で、ケズリ痕が著しい。23は小形のコップ状の土器で、底部付近に指紋が認められる。24は摩耗が著しく、口縁も不確実な小形土器である。内面に赤彩と漆様の付着がみられる。



第41図 SI-6 (2)



第42図 SI-6 (3)

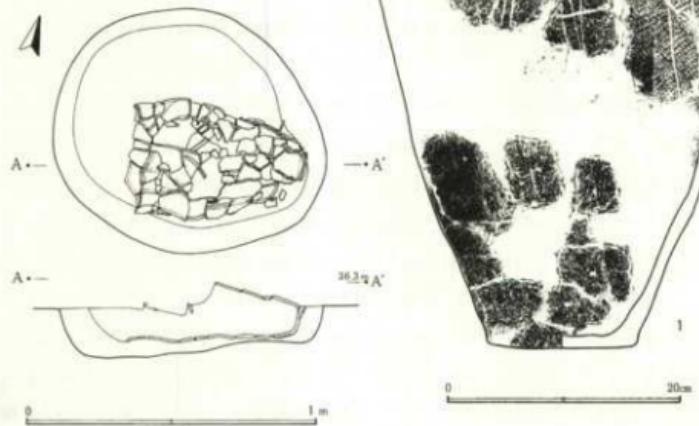


第43図 SI-6 出土土器 (4)

2. 土 坑

SK-1 (第44図、図版 6・12)

1T・3T 抜張区で検出された土坑で、大形深鉢1個体が横倒し状態で埋設されていた。確認面上の5cm未満まで耕作されており、土器も上半部に大きく欠損が認められたため、完掘した。平面形は約95×80cmの梢円形で、深さは確認面から約20cmとなる。単一の土層で埋められ、土器埋設状況から墓の用途も考慮される。1は堀之内1式中段階の大形深鉢で、4単位の浅い叉状の突起が付く。



第44図 SK-1

V まとめ

確認調査というごく限られた範囲の調査であったが、それでも山野貝塚という遺跡の保護・活用をはたしていくための検討資料は、いくつか提出できたと思われる。以下の項目にそって、簡単にまとめておきたい。

1. 貝層の分布

1973年の調査においても、ボーリング探査が実施され、第2図にある相弧状を呈する貝層分布が捉えられている。今回の調査では第45図に示したように、従来から認識されている遺跡範囲について、ほぼカバーする形でボーリング探査することができた。探査は、約1mメッシュの間隔で行い、各地点で確実に感触を味わえる貝層（いわゆる混貝土層でもあまり薄くなければ可能）を限定的に「貝層あり」として捉え、その分布をさらに細かく詰めて範囲とした。このため、1973年の既調査範囲を除き、従来相弧状と捉えられていた



第45図 貝層調査範囲

貝層はもっと複雑で、ボーリングで捉えられない薄い貝層の扱いの問題はあるものの、それそれがいくつかのブロックの集合となっていることがわかった（折込付図）。

また、この相弧状の分布外側に、20か所以上の小範囲の貝層分布が認められたため、一部にトレンチを設定して確認した結果、遺構内に堆積する貝層であることが把握された。図にみられるように北西部に最も密に分布しており、多くの遺構の重複が認められている。こうしたことから、北側および西側の未調査区域に、小範囲の貝層がさらに検出される可能性が強い。また、東西いずれの相弧状分布外側の未調査区域にも、ひろがる可能性がある。

前回捉えられなかった相弧状貝層のそれぞれの南限は、ほぼ確定することができた。精査にもかかわらず、相弧状の分布はひとまず図示した範囲で収束する。また、南東側の急な斜面はほとんど未調査なので確定はしていないが、地元の方のお話でも踏査によっても貝殻の散布は確認されず、分布の可能性は薄い。このように、貝層が断続的なブロックの集合にせよ、環状に分布する地形的な条件があるにもかかわらず途切れることについては、何か理由が考えられ

よう。

これを示唆するものとして、やはり地元の方から聞きおよんだ話がある。それは山野貝塚の立地する区域は永く原野であったが、大正時代後半に開墾されたという。開墾当初は谷際の南東側も全て伐採したが、谷から吹き上げる強風がはなはだしく、昭和初期に谷際の開墾を放棄し、現在にいたっているとのことであった。現在は雜木林が防風林の役目を果たしているが、それでも季節によってはかなりの強風が吹き荒れており、自ら現地踏査時に体験している。

千葉市譽田高貝塚の報文でも指摘されているように、貝層が部分的に形成されなかつた原因の一つとして、立地環境による制約の可能性が考えられる。つまり、縄文時代においても立地環境によっては、防風のため伐採を差し控えたのではないかろうか。その結果、ゴミ捨て場である貝層の分布も、いきおい集落内の切り開かれた範囲に限定されたと考えることもできるのではないかと思われる。

類例の増加がなければ実証性に乏しいかもしれないが、馬蹄形や相弧状の貝層分布の成因について考えるにあたって、立地環境などから検討していくのも一つの方法と思われ、今後の確認調査でも留意すべき点と考える。

2. 遺構分布と集落の範囲

限定された範囲であったが、ボーリング探査と確認トレンチによって、従来知られていなかった遺構の分布を捉えることができた。第46図に確認できたものを示すが、時期の確認できたものは西側の相弧状貝層外縁部の例を除き、北西部のSI-2をはじめとする遺構群や東部のSI-6など、堀之内式期のものである。おそらく、この時期の居住域は、貝層外縁から広く外側に展開するものとみられ、面状に大きく広がる貝層分布とそれほど関係しないものと思われる。



第46図 遺構分布概念図

前回の調査で貝層が確認されている、

加曾利B式～安行2式の住居跡はほとんど明らかにされておらず、晚期前半についても、貝層の区域が貝層内側に推定されるだけで、堀之内式期以外の居住域は不明といってよい。

また、通例では後期以降には限定されてくる墓域についても、埋葬遺体が確認されておらず、

明らかにし得なかった。僅かに堀之内1式期の土器埋設が伴う土坑1基と、SI-2の埋甕Aで骨粉が確認されているが、墓域を検討する資料とはなり得ない。

貝を中心とする遺物の廃棄場所は、貝層の分布が示すように、①東西弧状貝層の分布する遺跡内で最も標高の高い場所を中心とする尾根状の区域、②東側弧状貝層の分布する、北側から潤れ谷が入り込む緩斜面を開む区域、③廃絶された遺構の一部。以上の場所があげられる。また、前回の調査で北側の潤れ谷の入り込む緩斜面には、堀之内式～晩期前半までの多量の遺物包含が認められ、この部分も廃棄場所として利用されたと考えられる。

北西部は遺構の重複が調査範囲外に続くと予想され、その他の区域も隣接する遺跡の遺物散布域との境界は決め難い。仮に集落の範囲を決定する必要が生じた場合、各々の境界については今後の限界確認調査に負うところが大きい。

3. 出土土器にみられる集落の時期

本貝塚からは前回の調査と同様に、堀之内式～晩期前半の土器が出土しているが、今回の調査ではこれに加えて、微量ながら層位的に称名寺Ⅱ式土器の出土が確認された。北側から入り込む潤れ谷に面した緩斜面に位置する伊丹山遺跡、小櫃川水系の支谷谷奥に位置する角山遺跡では、この時期を主体としており、今後、本貝塚でも検出例が増加すれば、これらが一つの遺跡群を形成している可能性の傍証となり得よう。

居住域が明らかになった堀之内式期を中心に、後期前半から晩期前半の期間に集落は形成されたと思われるが、現在のところ貝塚の形成期間は、堀之内式～安行2式の後期の間に限られている。しかし、前回の調査に引き続き晩期前半の時期には、東北地方大洞式系や関西系晩期土器が出土し、本集落の交流範囲の広さを物語る資料が提供された。

4. 生産活動

絶対的な資料の不足と、分析資料についても完了していないことから、あまり明らかにできないのが現状である。それでも今回の中間報告的な成果から、展望や課題となることについて記しておきたい。

狩猟 動物遺体では、主な狩猟対象となったイノシシ・シカの骨が多数出土しているということがあげられる。これに対して、その道具と考えられる石鏃やその製作過程中の石器類の出土点数が、かなり少ないことが指摘できる。狩猟方法などと考え合わせ、今後検討していく必要がある。

漁撈・貝の採集 魚骨の分析はこれからであるが、その検出頻度は高くなる見込みであり、同定された内容から活発な活動が予想される。魚種について、分析資料の描いつつある村田川下流域の諸貝塚と比較すると、「ニシン科が主体的など共通するものもあるが、発掘資料ではス

ズキ属・マダイ・フグ科の出現頻度が高い。サンプル資料では村田川諸貝塚では出現頻度の低い、アジ科・サバ属の頻度が高くなる見込みである」という2点が、同定を依頼した小宮 孟氏より指摘されている。分析が進めば、「本貝塚の立地とその出土動物遺体が、東京湾東岸の湾奥部と湾口部の貝塚の中間地帯の様相をよく示す」という従来の見解に対し、具体的なデータをもって検証できると思われる。

貝類はサンプル採取地点で異なりをみせるものの、イボキサゴやハマグリが主体で、松島義章氏のいうB群集・A群集（松島 1979他）がほとんどを占める。時期がやや先行するが、後期前半では同時存在する宮ノ越貝塚（能城 1990）と比較すると、ほとんど同一の内容と思われるが、現在のところ山野貝塚では、汽水産のヤマトシジミは検出されていない点で異なる。能城秀喜氏は古地理から想定された繩文時代中・後期小櫃川下流域の海岸線を推定して、中・後期の下流域諸貝塚の5か所について貝類捕獲地・運搬ルートを検討しており、山野貝塚人の小櫃川沖積平野ルート利用の可能性にもふれている。今後、ボーリングコアのデータが明らかにされていけば、指摘されたいいくつかの問題点について、ある程度の結論を得ることができよう。

漁具と考えられるものとしては、骨角牙製品や土器片錘・軽石製品が出土しているが、用途の問題など検討すべきものがある。

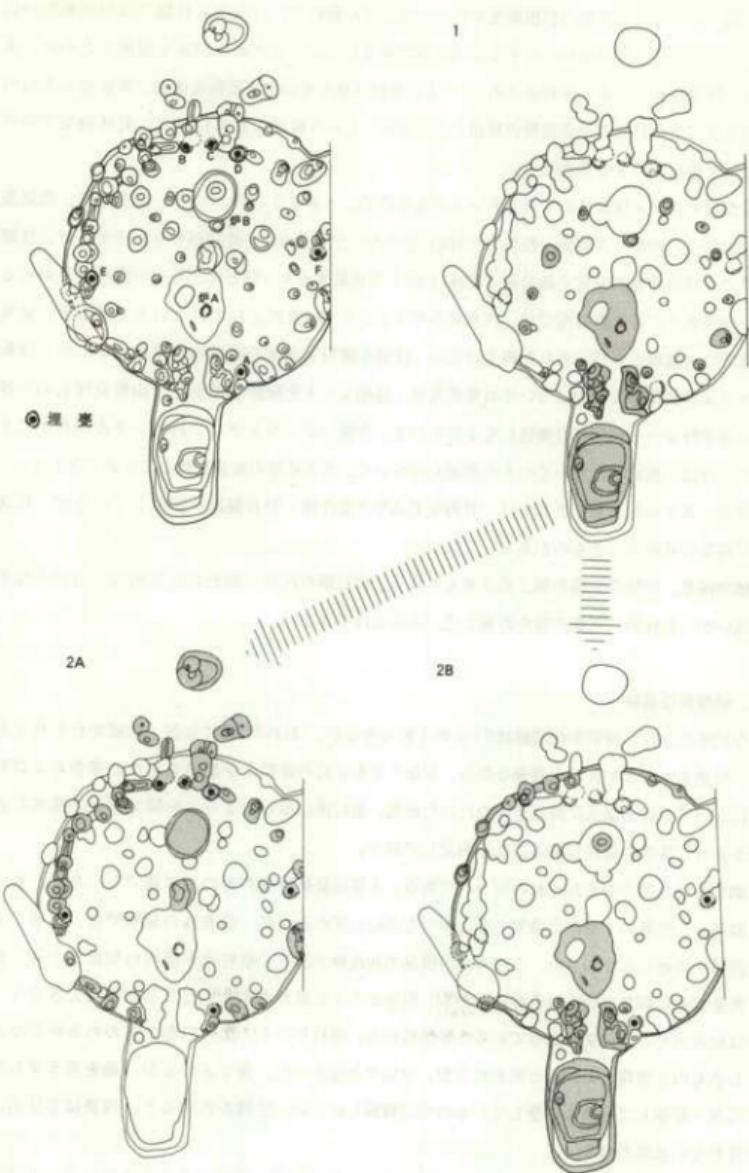
植物採集 植物性食糧の加工工具と考えられる、磨石類や石皿、敲石の石器組成に占める比率は高いが、具体的に活動内容や対象を述べることはできない。

5. 柄鏡形住居跡

今回検出された柄鏡形住居跡はSI-2の1軒であるが、ほぼ同位置で反復・拡張が行われており、埋甕すべてと炉Aは未調査ながら、少なくとも3回の建替えが想定された。調査および整理において菅谷通保氏に助言をいただいた結果、第47図に示したように分解できた。事実に誤認があれば筆者の責任であることを明記しておく。

網をかけた部分がそれぞれのプランである。土層は最終堆積のものが単純であったか、非常に似通った性質の土なので識別できなかったかのいずれかだが、調査時の観察では、土層で先後関係を決められなかった。1は本住居構築の初段階である。壁柱穴が隅円台形にまわり、他に奥壁寄りに炉Bに切られた柱穴がある。形態から1が最も古いということが支持できよう。炉は炉A内で2Bと切りあつてると予想される。連結ビットと出入口部と思われる柄部は、2Bのものと重複していると思われるが、分別できなかった。後でふれるが、軸を若干ずらして反復・拡張して2Bを構築しているので、判別しにくい。位置からすると、埋甕は本住居には伴わないと思われる。

次段階以降は、先後を確定させることが困難である。一応、説明のため便宜的に2Aと2Bとしたが、確定し得ない。2Aは壁柱穴が一部、壁溝によって連結されながら、円形にまわる。



第47図 SI-2 建替えの想定

出入口部が1とほぼ180°反転して付けられるが、基本的には1を反復・拡張している。連結ビットは外側に聞く形となる。柄部に穿たれたと思われるビットが単独であるが、これは本体から次第に立ち上がって出入口になる構造であったので柄部の壁は浅く、既に耕作などで失われてしまったためと思われる。出入口部寄りにある炉Bが本住居のもので、近接して本期に特徴的な中央部の柱穴が認められる。位置からみると、埋甕で本住居に伴うことが確実なものはB～Eの4基、可能性のあるものはA・Fである。なお、Aには骨粉が認められた。

2Bは1の軸を若干ずらして反復・拡張をしたもので、土層断面から2Aとの先後関係を観察するのは困難であったのでなし得ず、結果的にはプランが最も明瞭となった。壁を掘り込むように壁柱穴がまわるが、出入口部右側では検出されていない。連結ビットと出入口部である柄部は、1とほぼ同位置で重複するが、連結ビット間の空間などは、このままでは拡張した本住居のものとしては狭く、掘り方の外形に近づいた位置で掘りなおしていたと思われる。炉Bの底面に奥壁寄りの柱穴がみられる。炉Aの最終的な広がりは本住居のもので、灰、焼土を主体とする範囲が明瞭に区別された。埋甕で伴う可能性のあるものは、AとFである。

仮に2Aが1の次段階とした場合、炉A上面に接して堆積する貝層の存在が説明しにくい。逆に2Bを次段階と考える場合は、プランの内側に寄りすぎ、床面と同レベルか、若干下になる埋甕B～Dの存在をうまく説明できない。

現状では、反復・拡大例の存在を示すことはできたものの先後についての結論は導き出せず、課題をのこしてしまったことは、大きな反省点である。それでも、反復・拡大の状況を伝えることができ、また柄部が床面より高いレベルにある場合、土坑だけとなってしまうタイプがあることを、改めて示すことはできた。こうした例は重複の場合でも単独の場合でも、注意深く精査する必要を示唆するものである。柄鏡形住居跡は、現在、市原市武士遺跡の約70軒をはじめ、検出例が増加しつつある。さらに精査されることを期するところであり、堀之内式期の大規模集落と予想される山野貝塚にも多く検出されることが予測される。

6. おわりに

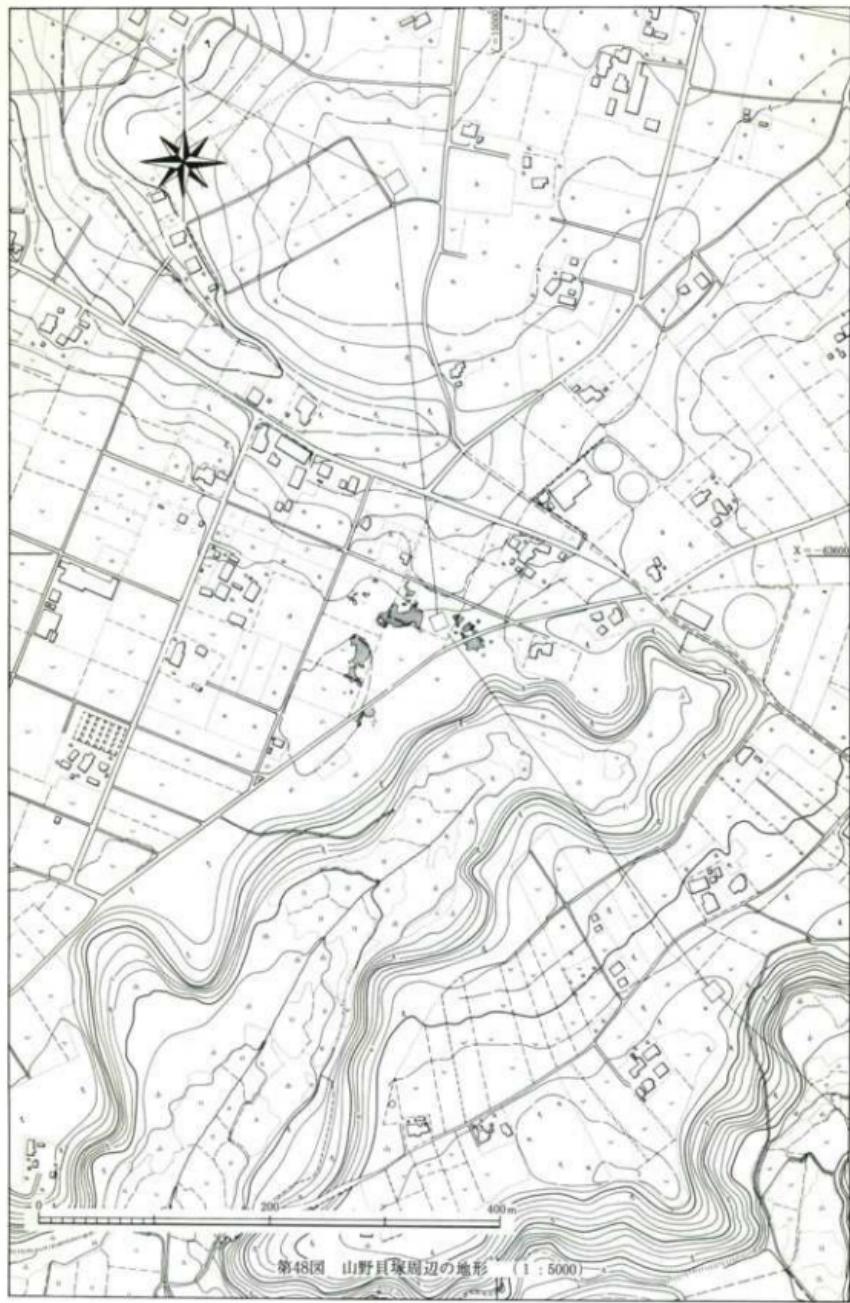
悪天候と限定された期間の調査・整理作業であったが、この確認調査の目的である現状の把握と、今後の保護活用のための基礎資料についてはいくつかの課題はのこるもの、既述してきた内容が示すようにひとまず提出できたものと考える。ここに改めて山野貝塚の重要性が認識されたわけだが、これを出発点として現状では良好な状態で保存されている遺跡の保護と活用の方策を、早い段階で具体化していく必要を強く感じている次第である。

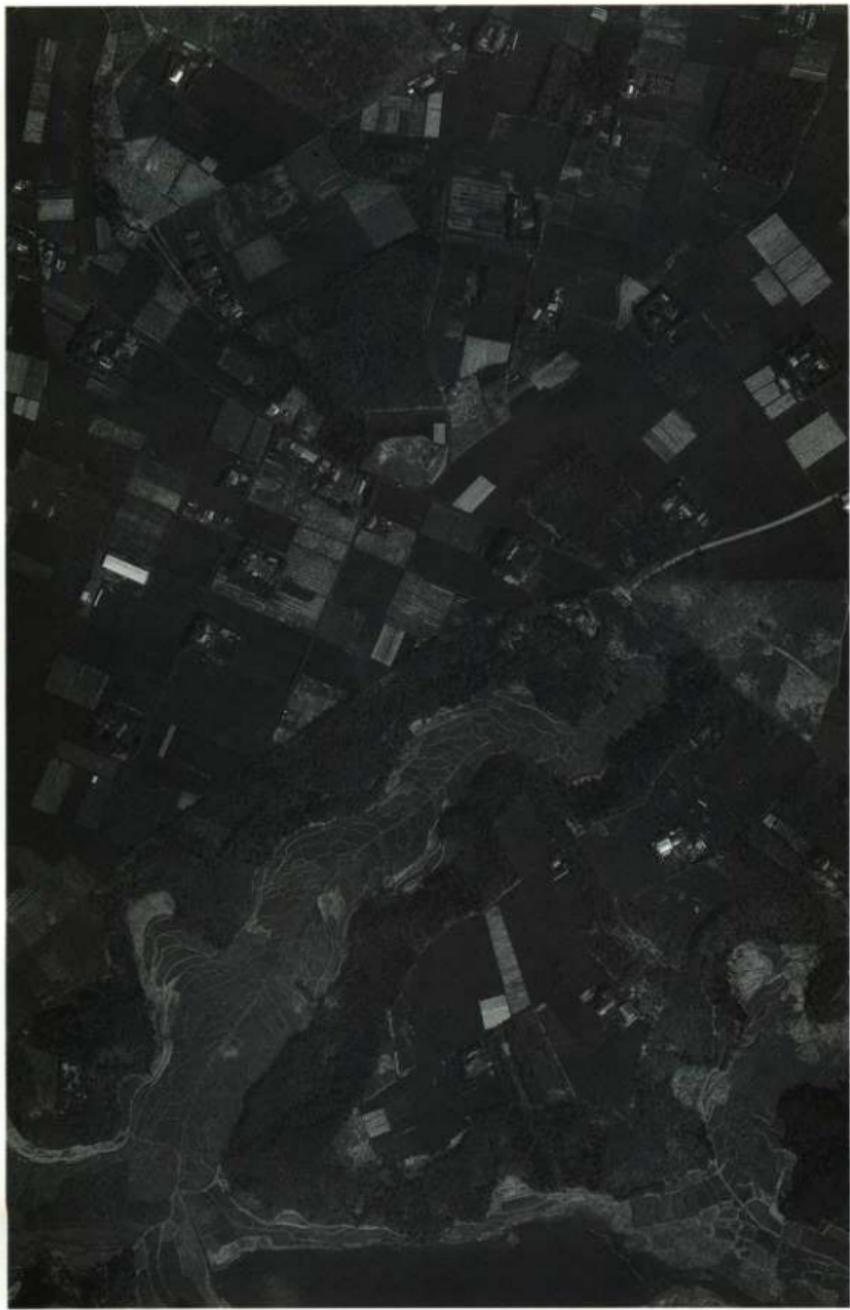
最後に、現地調査から整理作業に至るまで、非常に多くの方々の協力があってはじめて本成果がまとめられたことを明記し、心からお礼を申し上げたい。

註以外の主要参考文献

- 石井 寛 「山田大塚遺跡」1990年
- 石田広美 「角山遺跡」「君津広域水道用水供給事業に伴う埋蔵文化財調査報告書」1980年
- 市立市川考古博物館編 「シンボジウム 織之内式土器資料集」1982年
- 太田文雄 「余山貝塚確認調査報告書」1989年
- 岡村道雄・森鶴秀一 「里浜貝塚Ⅲ」東北歴史資料館資料集9 1987年
- 埼玉考古学会他 「シンボジウム 織文時代後・晚期 安行文化 発表要旨」1992年
- 埼玉考古学会他 「シンボジウム 織文時代後・晚期 安行文化 別冊4」1992年
- 三森俊彦他 「袖ヶ浦町伊丹山遺跡」1979年
- 都 淳一 「横芝町山武越山貝塚確認調査報告書」1990年
- 鈴木公雄 「千葉県山武郡横芝町越山山武越山貝塚の晚期織文土器に就いて」『史学』第36巻第1号 1963年
- 鈴木公雄 「越山Ⅱ式土器に関する二、三の問題」『史学』第37巻第1号 1964年
- 鈴木公雄 「関東地方晚期織文文化的概観」『歴史教育』第16巻第4号 1968年
- 鈴木公雄・林 謙作編 「織文土器大成4 晩期」1981年
- 袖ヶ浦町編 「袖ヶ浦町史 通史編上巻」1985年
- 出口雅人 「千葉市譽田高田貝塚確認調査報告書」1990年
- 能城秀喜 「袖ヶ浦町宮ノ越貝塚について」『千葉文庫』第25号 1990年
- 野口義磨編 「織文土器大成3 後期」1981年
- 早川智明 「所謂安行式について—土器型式の再編成に関する予察—」『台地研究No.16』1965年
- 四柳 隆 「小見川町白井大宮台貝塚確認調査報告書」1991年

写 真 図 版





山野貝塚周辺地形の航空写真—昭和47年撮影—（約1：5,000）

図版 2



1. 遺跡遠景（西から）



2. 遺跡近景（東から）



3. 遺跡近景（東南の谷から）

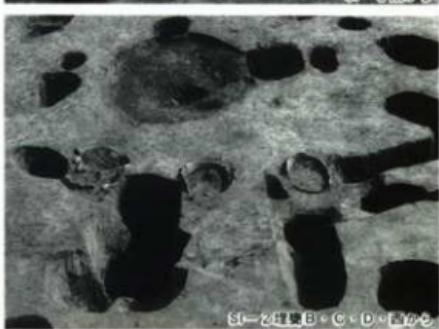
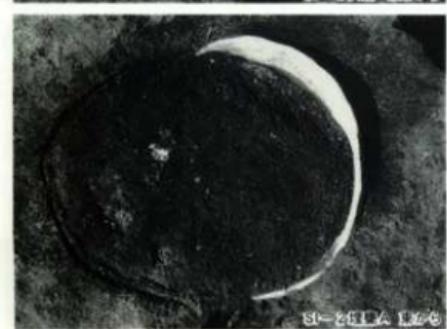
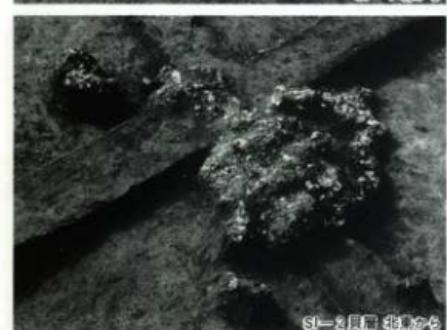


各トレンチの状況 (1)

図版 4



各トレンチの状況 (2)



各トレンチの状況 (3) SI-1・SI-2(1)

図版 6



S1-2(1) 1号 南西から



S1-2(1)F 2号



S1-6(1) 1号



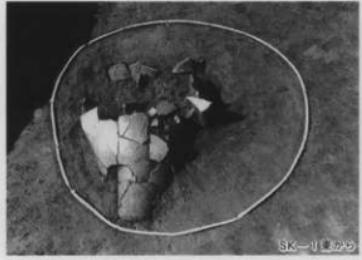
S1-6(1)F 2号



S1-6(2) 1号 南東から



S1-6(2)F 2号 南東から

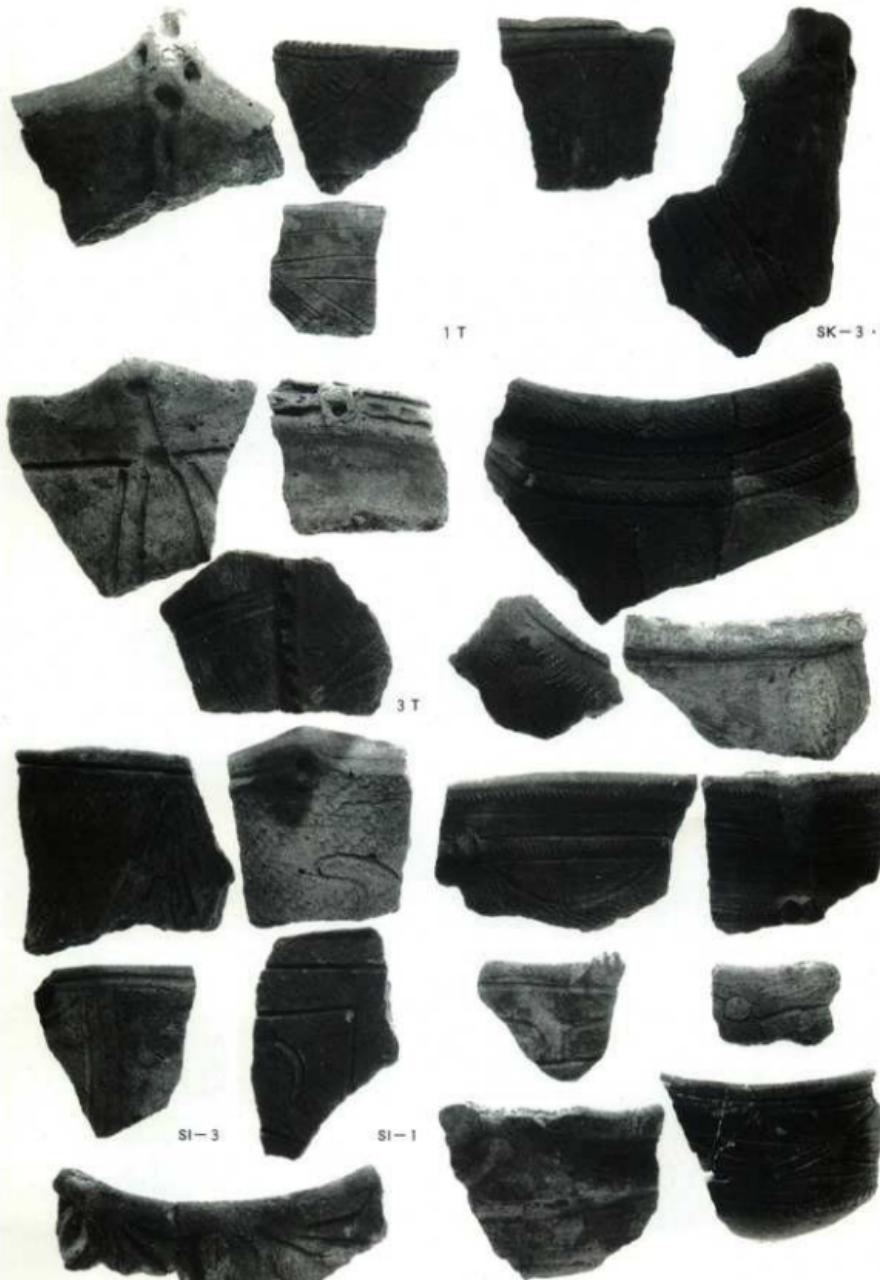


S1-11 1号

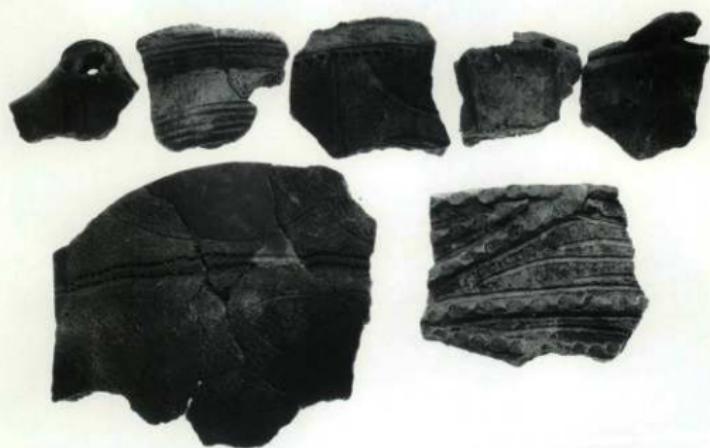


S1-11F 2号

S1-2(2)・S1-6・SK-1



土器 (1T・2T・3T・SI-1・SI-3・SK-3・SK-4)



4 T



5 T



7T

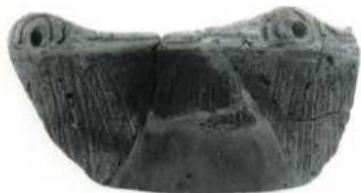
8T

10T

11T

土器 (7T・8T・10T・11T)





2
4T



11
11T



4
4T



30
SI-2



6
7T



9
11T



32
SI-2

土器 (4T・7T・11T・SI-2)

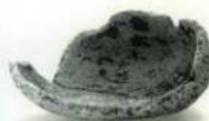


18
SI-6

1
SI-6



20
SI-6



21
SI-6



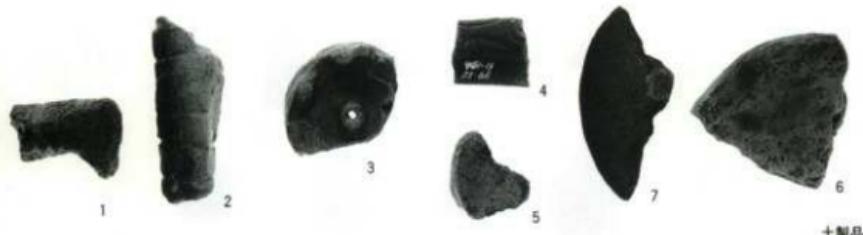
2
SI-6



15
SI-6



1
SK-1



土製円板



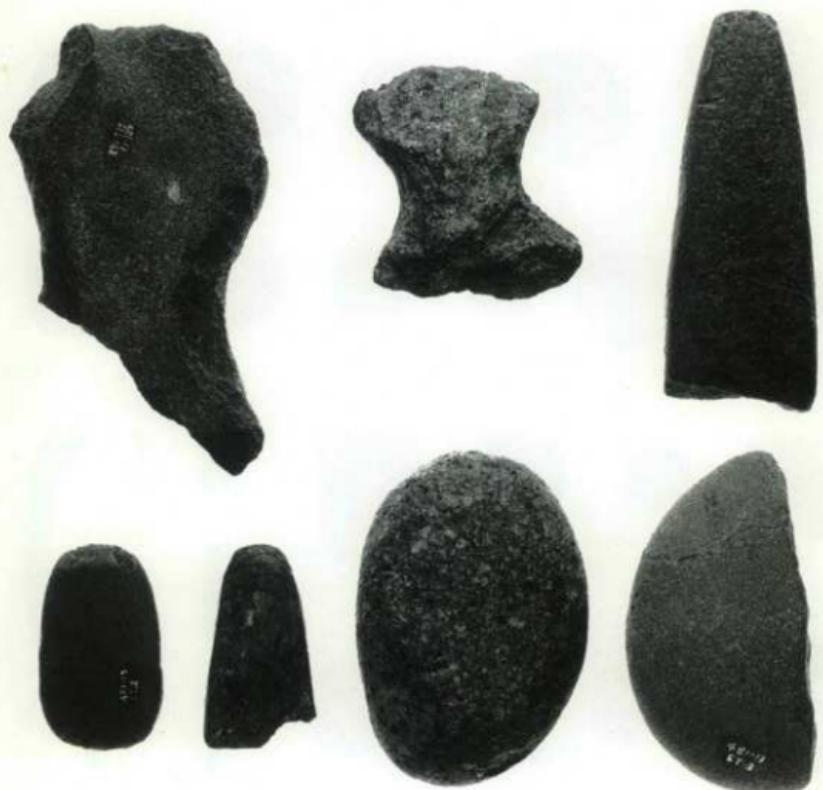
土器片錐

骨角牙製品

土製品・土製円板・土器片錐・骨角牙製品



石器 (1) 尖頭器・石鑿・石錘・楔形石器・UR一口・削器・石核



石器 (2) 打製石斧・磨製石斧・種斧・磨石類

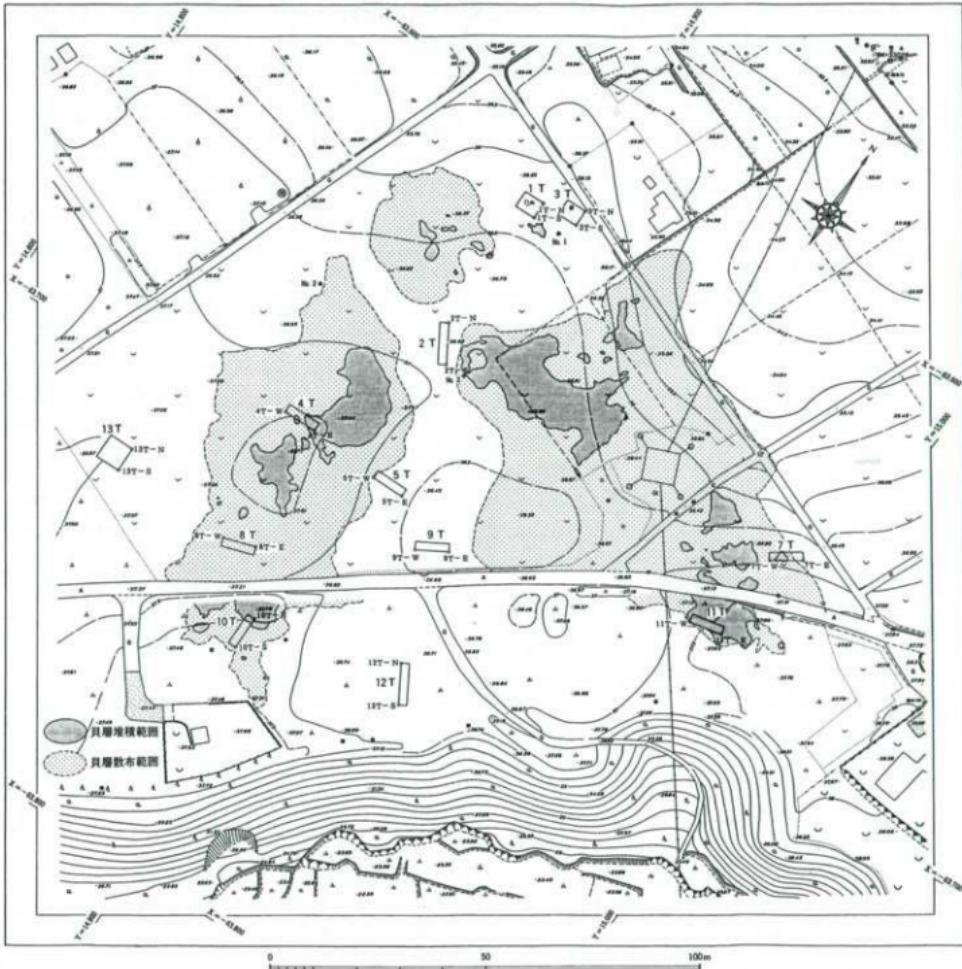
抄 錄

フリガナ	ソデガウラシサンヤカイブカハックツチヨウサホウコクショ
書名	袖ヶ浦市山野貝塚発掘調査報告書
副書名	
卷次	
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第239集
編著者名	上守秀明
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡809番地2
発行年月日	1993年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
山野貝塚	袖ヶ浦市飯富	市町村 遺跡番号 481— 013 229	35° 25' 33"	139° 59' 50"	1992.10.01~ 1992.10.30	200m ²	学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山野貝塚	貝塚 集落	縄文	貝層 20か所以上 住居跡 8軒以上 土坑 13基以上	棚之内~安行3b(姥山)式 土器 土偶・耳飾などの土製品 石礫などの石器類と多量の螺 骨角牙製品	相弧状に広がる貝層 の分布範囲を確定 遺構内貝層を20か所 以上検出し、居住域 を把握

山野貝塚地形測量図



千葉県文化財センター調査報告 第239集
袖ヶ浦市山野貝塚発掘調査報告書

平成5年3月31日発行

発 行 財団法人 千葉県文化財センター

四街道市鹿渡809番地2

印 刷 有限会社 ミリオン印刷

千葉市中央区南町3-4-2

本報告書は、千葉県教育委員会の承認を得て
増刷したものです。